麻生路郎主宰

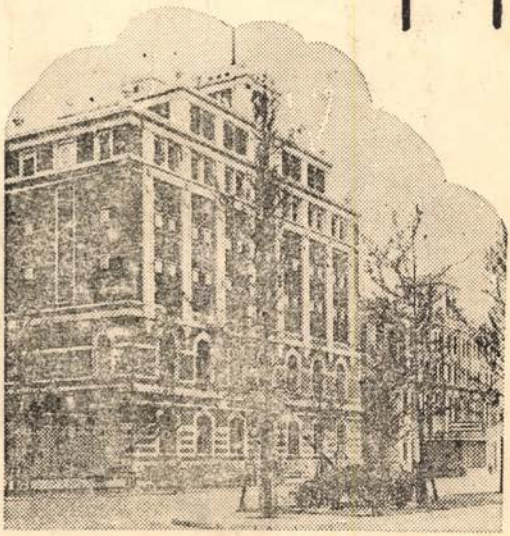
川柳雜誌

六月號

大正十三年三月三日第三種郵便物認可 昭和十年六月一日發行 第十二卷第六號(毎月一回發行)

この會社
この保險

一番大きな會社であること。一番すぐれた内容を持ち一番信頼出來る會社であること。保險料は安く而も多額の配當を行ひ、又優秀寛大な保險約款に依り親切な取扱をする會社。つまり會社もその提供する保險も理想的な會社。これが日本生命である。



日本生命

大阪東區今橋四丁目

近作

麻生路郎

折鞄麥酒を飲むに放さない
夫婦仲を裂くが最後の親切か

就職

駑馬に鞭ち子を學校へやる
電話でも知れる病のいきづかひ
鯛もいや春ももものうし毛が拔ける
藥忘れて机の埃り見てゐたり
置電燈一只一冊の聖書あり

川柳雜誌第十二卷 第六號 目次

文苑

書齋から……麻生路郎…(四)
武玉川二篇研究(十四)……梅本秋の屋 森東省 蛭子二魚…(一九)
明治以後の川柳年表(四)……西島○丸…(二五)
月評 街の高臺……西田吉水 卿樂車…(三六)
四國遍路……酒井大樓…(四二)
川柳觀心寺吟行……卿樂記…(四四)
東京から……福田山雨樓…(三九)
木曜會餘談……平井與三郎…(四一)
街に住めば……高橋かほる…(四一)
川柳二十日會……機見女、卿樂記…(四四)

創作

近作……麻生路郎…(一)

近作柳樽……麻生路郎選…(六)

川柳塔……麻生路郎選…(二九)

粒々集……五健、鞍馬、柳秀…(三五)

福田山雨樓氏送別句會……與三郎、汀柳記…(四六)

一路集　妻……水谷鮎美選…(四八)

　　税金……須崎豆秋選…(四九)

各地柳壇……路郎、艸樂、汀柳、整理…(五一)

川柳家の戸籍調……綠雨…(四八)

上汐町から……汀柳…(五〇)

編輯の窓……汀柳…(六四)

本社關係の人々……(六六)

表紙……檜重

表紙畫……きよし、島平、宰二郎、しげを、路郎、合作…

南紀湯崎温泉千畳敷に遊ぶ路郎主幹（右）と岩崎柳路氏夫妻（左）三月二十九日

書齋にて

麻生路郎

お互ひに考へて見たいことがある。濱の砂子ほどある歌人の中から、大隈言葉が認められたこと、辨玉が認められたこと、與謝野晶子が認められたこと、石川啄木が、認めらたことに就て——。

これ等の歌人の認められ方には時代のあとさきやその人の性格や立場などから考へて見ても、幾らか相違のあることは云ふまでもないが、この中で尤も一般的に知られ方のすくない。辨玉のことを少しく書いてそれを川柳の畑へもつて來てお互ひに考へて見たいのである。

日本文學研講明治篇の中に、橘守部系の歌人と題して次のやうなことが書かれてある。

橘守部の門からは辨玉、日下田足穂橘道守等が出た。

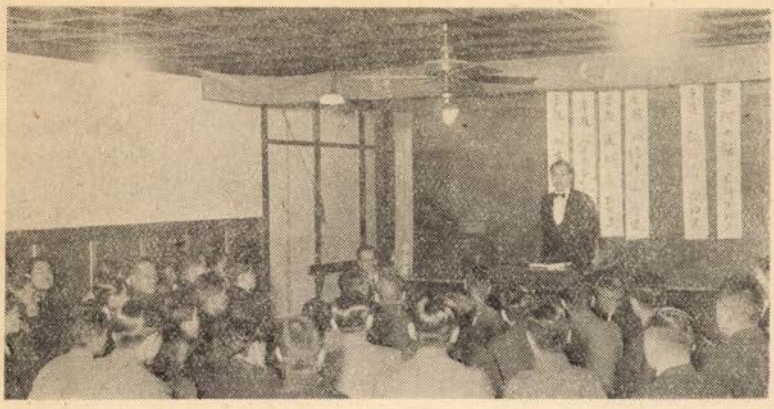
辨玉は江戸の人、後横濱に近い神奈川三寶寺の住職となり、特に長歌に優れた。明治十三年歿（六十三歳）。長歌の集「瑲々室集」は二巻本で、明治十二年刊、長歌二百十餘篇を收め、近藤芳樹の序が附してある。短歌の集を「由良牟呂集拾遺」と名付け共に續歌學全集に入り、尙「瑲々室集」は國學大系にも入つてゐる。その長歌には種々のものがあるが、就中當時の所謂文明開化的情趣を詠んだものに特徴がある。或は蒸汽車を、或は寫眞鏡を、或は傳信機を、或は瓦斯燈を、その特異なる萬葉風を以て歌つたところ蓋し比類なきものといへよう。

茲にその一二の例を擧ぐれば

過横濱異人館歌

武藏の海横濱の津は　まるなぬる異國人の　わけてすむ町も八十町　やちまたにつゞく高屋の　庭ひろき厨を見れば　ゐの子は垣つに放ち　牛は杭打つなぎ　庭鳥はふせごにかへり　生膚をたちて烹らゆか　逆剝にはぎて燒かゆか　朝なのあへ夕けのまけにしが親をとらくを知らに　しが子をとらくを知らに　遊ばひをるよ鳥もけものも

皮肉な風俗畫を見る思ひがするではないか。



（會句俳本座歐鄙樂倶橋日本、於日七月四）氏蹄柳蹄雪るされてゐる講演の話を

看蒸汽車走鐵道偶爾作歌

久堅の空のどけきを　鳴神かへづれ
おちくる龍神かいまきのぼれる　か
きくらし雲ぞ起れる　鳴り響き音ぞ
とどろく　其雲はたく火の煙　其音
は車の響　立ちとまり見るまもあら
す　連れるやかたのうちに　ここば
くの人つどへ乘せ敷渡す黑がねの道
走りて過ぎぬ

一篇文明の機關に對する驚異と讃嘆の情が愉快に現されてゐるではないか。

以上の辨玉の長歌を讀んで、なる程歌つた材料は新らしいが古い言葉であらはしただけに、まことに悠長な表現でしかないと貶し得る人が幾人あるであらうか。それにしては後者の如きはあまりに生々として蒸汽車なるものが眼に見えるやうではあるまいか。

今日の川柳が徒らに陳い材料を新らしい言葉や奇を好んだ叙法によつて表現して、尙右の長歌だけの力を充分に發揮し得ないとすれば、そこに考へなければならない問題が確に横はつてゐるのではあるまいか。

まだ〳〵從來の十七音字形式で、しかも、ありきたりの言葉によつてさへ相當力强い句が創作し得べきではなからうか。

新らしい言葉、新らしい材料、新らしい表現法に據つて獨創的な句を得ることは、まことにのぞましいことではあるが、必ずしも、新らしい言葉、新らしい材料、新らしい表現法が獨創的な名吟佳句を生むとは限らないことにも思ひ及ぶべきではなからうか。

古來、平談俗事によつて創られ、平言俗語によつて綴られた一片の川柳ではないか。

私は試みに「川柳雜誌」の中から二三の例句を拔いて吟味して見たい。

猿の顏子猿のくせに老そゐる　春秋
人間と思はてゐる邪魔くさき　同
ゐらい人の朝日一本たけもらひ　豆秋

これ等の句は何れも佳句として推奬するに足ると思ふが、特に新らしい言葉や新らしい形式を踏んでゐる譯でもない。けれども、子猿に對する觀察の凡手でないことには何人も異論なからう。平言俗語によつて綴られてあるからして獨創的新味を忘れてもいゝとは云はない。寧ろ獨創的新味があつてこそその句が光るのであることは辨玉の長歌を見ても頷づくことが出來やう。

近作柳樽

路郎選

實印は相手に見えぬとこで捺し　今治　伶人

汐干狩吸ひつけ煙草口でうけ　同

就職の時まで待たす戀もして　同

馬方に禮を云ふのは助手の役　同

禿げ切つて人生觀もちとかはり　神戸　蘇堂

子が病んで風雨の街に林檎買ふ　同

名論に結末がなく醉つて居る　同

見送りへ邪魔くさそうに顏を見せ　同

尋一の子に懸る氣の未亡人　大阪　大門

親類の子に崩された五圓紙幣　同

北濱風景

寄り附がボケてしまつて二日醉　同

東京の引ケ開いてゐる靴辷り　同

自轉車を突きあてられた自前の妓　今治　一風

流行妓だつた女將の總入齒　同

人格と別に渡した運動費　同

ひげそつてひとはなほつてゆくのです　藥ケ池　靜太

窓からの山を寫しぬ寂しき日　同

ともしびや癒えぬわたしの鼻みゆる　同

肥えた痩せたと感情をもてあそび　同　一更

かくて又一年櫻は忘れられ　同

言葉たくみに同情されんとす　同

ひかされる日の洋髪も出來上り　松江　山川兒

爪彈けば何か淋しいものに觸れ　同

金齒光つたまゝで落ちぶれる　同

スクラムを組んで撮らせる麗らかさ　東京　佐保蘭

親しみは空氣枕にある丸味　同

大島海岸

東京にかぶれた島の娘かなしく見　同

貧乏を知らう筈なし子の寢息　名古屋　世香

おゝそうか〳〵玩是の無い話　同

お針娘の遠足と知る交叉點　同

鏡かけ妓の本名のそれと知れ　今治　流汀

極道の入門といふ鹿の子帶　同

待ちぼうけと知つてかバーのビラをくれ　同

又逢ふて戀にはならず尾張町　東京　無鐵砲

大丈夫眼がもの云ふた投げキッス　同

手土産へ動いたその眼見逃さず　同

月おぼろ丘のアパートギター鳴る　大阪　破鼓

競り市は更けて小鼻に脂浮く　同

會者定離今日待ちぼけの煙草吸ふ　同

春くれば養蠶燈をすゝめに來　信州　有爲郎

サイドカー肥料屋さんと知られたり　同

まだ雪の畠へ土をさがしに出　同

末席へ避難して來るサイダ黨　青森　夢一文

ほろ酔のてすりから見る朧月　同

階級によつて小使返事する　同

あれからを訊かれて女給ふいと立ち　大阪　梢雨

花名刺確か讃岐の産と聞き　同

勇退の窃かに期するところ有り　同　世間音

太陽が中天に來た齒磨粉　同

驕慢なマダムの上に藤が垂れ　同

眞直ぐに拔けて公園春淺し　同

孝行もせず佛壇の傍で寢る　神戸　九葉

櫻櫻月給取りは淋しかろ　同

バーテンダーマダムに押されがちの夜　同

病狀は淡墨色の雲に似て　尼崎　觀月

水かけて賣るさかなとは知りながら　同

服ぬいで一輪ざしの香がうれし　同

そう來ればこうも出ようと靴をはき　神戸　久米雄

新綠が落第生の眼にも泌み　同

云譯は後に廻した酒の味　同

細少のチップを受けて處女で居る　高知　翠洞

先生の通りを母に敎へてる　同

ふとふれて掌の冷さにぎよつとする　今治　輝親

肩借りて嬉しくなりぬ春の酒　同

みなし子の日記は白く風が鳴る　同　小樓

枕とばしてねるも若さの一つなり　同　同

胸病みて一人泣くこと覺えたり　靈ケ池　六朗

名をよべばたゞ氷嚢がゆれるのみ　同　同

籐椅子へ菜種が咲いて風が吹き　同　流之介

櫻花の下働く人がかへりゆく　同　同

春晝のこゝろ貧しくリンゴ嚙む　同　縷紅

子の意志のはげしき玩具買はされる　同　同

一生に一度の化粧のぞかれる　竹原　都子

のぞかれて嘘云ふた瞳の置どころ　同　同

人事欄危篤が續く親心　大阪　沐天

ピストルも握つた指でゲーム取る　同　同

振りきつて來たら街路樹が悲しげ　竹原　呂烈

識る人がない氣易さベンチに寢　同　同

金貸すと出る條件の六ツケ敷さ　今治　文庫

青春を見離すやうに髪の脫け　同　同

世帶染む妻に貼り柾あてがはれ　大阪　牧人

奥さんを賞め喰べ醉ふた靴をはき　同　同

町々へ春をまいてるタニシ賣り　奈良　千畦

ハイキング紅一點のもてること　同

ひよつこりと代參頭下げたきり　東京　史葉

シグナルを無視して通る午前二時　同

動物園事故がつゞいて春になり　大阪　葉光

野球狂に雜音などはないのなり　同

君も又春を浮かれる一人かい　神戸　朝雨

冷たさは覺悟の前の應接間　同

產婆またつみの子供と思へども　大和　翠峯

命日に歸つて來たも引き合せ　同

宿泊所に居る事母は知らぬなり　松山　笑鬼

藥とも馴れ看護婦とよく話し　同

群衆へ巡査拗ねてる樣に立ち　十三　琴泉

梅干をオカズに春をたがやかし　同

官服を脱かせて飲みに連れてゆき　服部　利生

エロ沙汰の裁きをつける年となり　同

取引所金持ばかりにはあらず　神戸　勝太郎

子を乘せたボートくらげと共にゆれ　同

客一人殘して床屋水を打ち　今治　紫陽

鐵則と別に主人の朝寢なり　同

流線型などゝお祖母樣ハイカラな　伊豫　富美女

大臣のお國言葉をうれしがり　同

ならし髮たのしき夢の日が近い　同　京司

電話口出てはよくない父が出る　同

病癒えて勤める

諦めた日が不思議ですキーを打つ　千里山　不美子

僞りの繼木蓮の花眞白　同

榮轉にされて淋しく都落ち　愛媛　草樓

行儀よくいたゞきますもなさぬ仲　同

まだ繼がないのを雲雀笑つてる　加古川　天秋

嫁ぐ娘がぼんやり春の月へ立ち　同

それがさうならと話が折れて來る　今治　曉童

目をむいてピストルをうつ男の子　同

唇の乾く夜なり繼に倦き　奈良　葉魚

國防熱子に銀紙を拔き取られ　同

こゝろみに春の廣さを這ふて見よ　富山　照坊主

税關の顏のゆがみへドルが落ち　同

忠僕と云はれて藁に荒れた指　名古屋　三八朗

飯こぼす母の姿の老ひ給ひ　同

修養を說く君なりしうたてくも　大阪　苦捻

御曹子課長やうやく二十八　同

どん底にせめて良心抱いて居る　長崎　柳兒

重役の閥の社員と打解けず　同

どうせ無い命へ輸血の注射のと　大阪　菊路

呑ますだけ呑ませて醫者は手を放し　同

君も來い貴女も來いのブドー畑　岡　公子

十二時に一時に乳房寒いなり　同

朝鮮へ歸る土工の腕時計　奈良　双亭

榮轉も左遷も同じ汽車で發ち　同

倖せを語るに濟まぬ姉と座し　大阪　節子

不自由な世帶道具を笑ひ合ひ　同

春風に押され女も少し醉ひ　京都　丁路

パンクして呑ん氣な人に取卷かれ　同

逆境の女が煙草よくふかし　大阪　雅星

妹が病んでゝ靴が磨けてす　同

耳鼻咽喉科古い雜誌で待たしとき　同　三碧

春の陽に又も算盤おき違ひ　同　源太

草に寢て貯金函でも買ひませう　同

部屋いつぱい公休の陽がさしこんだ　同　千鳥

拜啓と書いて思ひ出に耽けり　同

自殺者の忘れたものにこの瓦斯代　金澤　柳之助

正當に逆らう事を許されず　同

忍從のバットを嚙めば眼にけむる　高知　星水

副業に彼是迷ふ畑を打ち　同

相愛の仲をゆづうのつかぬ親　神戸　忠司

受驗場出れば眩しい眞晝の陽　同

受驗すんですし屋へ母に導かれ　大阪　歌都路

病上り歩けたあとを振りかえり　同

干物も四月の色で搖れてゐる　島根　健芳

新妻も聲も明るき今朝の幸　同

僕が僕の影え見詰めた悲しき黃昏　松江　庄介

知事の犬そこらの犬に負けてゐる

京都まで一緒に行く氣か窓の蠅　同　文兒

座布團も破れ身體に際がなし　同

初戀に破れズボンに皺が出來　大阪　寒草

養雞の趣味を訪ねてくさいこと　同

病氣するよりはましだと飲んでゐる　東京　丹三郎

齒痒ゆさは心急かるゝ人頼み　同

襟垢を氣に病む春の風となり　大阪　晤栽

申告書未だ書足らぬ兒があつた　同

不具の子が玩具の中にうもれてる　同　水客

意地惡なあねのお膳を片付ける

未完成交響樂

我が戀はとはに終らでピアノとす　大阪　美千江

夕さゝら知らぬ人と酒を酌み　札幌　非常兒

動いてさへ居れば金魚は嬉ばれ　洋糧　義風子

お隣で問ふても知れぬ程に住み　奈良　青柿

露天湯は蟹も來さうな磯つゞき　今治　十靜

苦しさに大きく息をしてみたが　松江　四朗

遮斷機に出前片足のせて待ち

かた肌をぬいでモデルとなる浮世　　鳥根　凡愚

コーヒーへ郷愁拾ふ宵となり　　大阪　やすを

新築は法被の禮をやたら受け　　名古屋　長樂

みつる、いさむ、清美三氏の開商を祝す

三人の足並揃ふ花ざかり　　大阪　あや美

病床で弔電を打つ淋しさよ　　尼崎　正柳

異端者のやうに長男詩をつくり　　高知　翠葉

三角の戀を押へて平和なり　　大阪　清美

五月雨で一封一の部屋ばかり　　桑江　雛千代

あきらめがちつと女の眸をみつめ　　齋ケ池　春太夫

急病へ醫者落着いて〳〵　　竹原　芳泉

みへすいた世辭あさましく横を向き　　同　春帆

昇給を噂ぎつけて友呑みに來る　　齋ケ池　澄魚

駐在所ヂロリと何も言はず書き　　花蓮港　ちやん笠

珍客にされては口がきけぬなり　　今治　泊灯

ちと肥へたようだと友に勵まされ　　名古屋　嵜喜固蕪

獨り身のせめてズボンの寢じきする　　大阪　玉葉

名犬ハチ公に題す

表情へ云へぬハチ公の二十年　東京　不二號

まあ座れのこんの酒をぐつと飲み　豐嬢　美彌

氣拙さを捨てたく障子開けに立ち　鳥取　茂子

死に切れず坂を下れば無縁塚　島根　さわだ

手の屆くあたりはさまでかゆくなし　竹原　蛙庵

叱られて思はぬ咳を出してみる　鳥取　喬士

或る時は旦那も政七ツとんとなり　大阪　墨洲

散つた花尼僧の足が避けてゆく　金澤　立帆

馬鹿になるのも要領の一つにて　松江　充子

東京もやつぱし草鞋賣つてゐた　同　京介

兄としての情も見せず嫁がせり　大阪　つと夢

社交振りが好きで嫁いで來て淋し　神戸　天風

ルンペンの群れへ役所の冷かさ　高知　苦佛

戀のない畫のシャボンの泡立つは　大阪　晴夫

エプロンの後を見れば紋羽織　花鳥

ちらほらと櫻咲くのに移民船　岡　寛水

松並木ひと、慕もの丶筋が出來　神戸　吉左右

鍛入のバツチうるさくまとひつき　大阪　栞

射的場の眞赤な幕が笑つたな　島根　朴泉

御主人の子である故に逆らはず　大阪　都會人

二十六處女のほこりはさびしくて　岡　美代路

仲人がバツクオーライ路次の奥　同　阿伽陀

某氏左遷

麥五寸平和な村をがたつかせ　西條　孤鶴

日本髪結へば彼女が高すぎる　一宮　美津女

盜汗ふけば山百合にほふ部屋となる　千葉山　一沫

高島田スポーツマンと誰が知ろ　島根　章泉

春あさく女の夢を見てゐたり　今治　藤生

よろこびが明日に迫つて湯屋を出る　金澤　綠水

合格は父へ約束せまるなり　神戸　木履

新婚へ鋭い獅子の眼がひかり　大阪　笙人

ルンペンか娼婦か街の二流記者　同　いの助

春の風ゲルベの香をもかゞされる　同　坊茄子

段々と落日になつた無性髭　同　素月

逢引の影へ波紋が二つ三つ　同　やすを

武玉川二篇研究（一四）

梅本秋の屋
森東魚
蛭子省二

（419）首途のわらち履せてうち詠

省二＝旅立の身仕度、草鞋はかせて、道中無事でと、うちながめる。（參考句）「諸事頼みまするとあしをこしらへる」

東魚＝「履せて」は、ハカセテかフマセテか何れであらうかはかせの方であらうとは思ふが、兎も角、初旅に出してやる親心であらう。

秋の屋＝可愛い兒に旅をさせるので、親が草鞋をはかせてから、その姿を打詠めるのである。

（420）供を呵て這入檢校

省二＝檢校の威風を示したわけ、且つ口やかましくもあつた。

東魚＝面白い句である。

秋の屋＝盲人の氣むづかしい態度が、十四文字でよく表現されてゐる。

（421）日蓮記よむ聟は入智惠

東魚＝眞面目な日蓮記のやうなものを讀むと、養父母に氣に入る事請合ひだと、入智惠をされたので、且つ恐らく此家法華信者であらう。

秋の屋＝池上の會式の日には、舅姑のお供をもする。

省二＝嫁はお經をよみ習ひの手で、入智惠で早速日蓮記をよむなどは、聟氣質に叶ふ。

（422）船は捨るに乘物の恥

東　魚＝船が寧ろ早く着いたのに、乘物が陸を來ながら、遲くなると云ふのは恥だし酒手をはづまないからだと云ふやうな事かと思ふが、甚だあやしい。再考。

秋の屋＝前說の如くであると、船を捨てるに、でなければならぬ。乘物の恥も解釋に苦しむ。

省　二＝私にも乘物の恥のところが、確心もて文を綴り得ぬ

(423)　又一度十六七に人見知

東　魚＝子供の物心がつきかけた時、人見知りをするものだが、又十六七の色氣の出る頃、むやみとはにかむ。

秋の屋＝思春期になると男女ともに、異性に對する時は、顏を赧めなどして、人見知をするものだ。

省　二＝贊。人見知するうちは無事。序に研究してもよい句「娵のかほ生れて二度の人見知」(ム十八)。

(424)　逆おもたかゝ質の始り

省　二＝貧乏曾我、古川柳に「質草は逆澤瀉が始なり」。澤瀉縅を逆にした鎧。

東　魚＝質の始りは、あれで御座ンせうといふ洒落である。

秋の屋＝逆澤瀉の鎧を繪畫には、澤瀉の金具を打つた鎧に描き、演劇などにも同じ鎧を着るが、これは全く誤謬であつて、草摺と袖の地と異なる色糸で、杉形に威したものを、澤瀉威といひ、これを逆にしたのを、逆澤瀉威といふのである。質の始りは、「ひらがな盛衰記」にある、梶原源太の產着の鎧の方が、少し早いと思ふ。

(425)　有馬筆鰒と言ふ字に顏を出

省　二＝舒明帝に御子あらせ玉はず、有馬溫泉に御入浴遊ばし玉ひ、御皇子を得させられ、有馬皇子と御命名あらせられた同溫泉の有名なる所以、篠竹多きところから、青白赤の糸で軸を飾り、人形を仕込むで子持筆、人形筆を工夫し名物とした。字をかく時に人形が顏を出す仕掛けである。鰒といふ字を認めた時に顏を出したとは、雪の溫泉の鰒だ、健美〳〵。(參考句)「色文にひよいと顏出す有馬筆」。

秋の屋＝過日某式から此の句に就いて質問を受けたが、「鰒といふ字」が不明であるが、前說の如く鰒の友を呼ぶ手紙を書くといふ意歟も知れない。

東　魚＝鰒でも喰はふといふ物ずきな人物だから、奇を好んだ有馬筆なども、調和するやうに思はれる。扶桑名所名物集に「かぐや姫昔しのびて有馬筆竹の中より出る人形」といふのがあつた。

(426)　しやぼんの玉の門を出て行

省　二＝しやぼん玉が、ふウわり〻〻として、丁度面白くも門をくゞつて、向ふに飛ぶ。麗さだ。

秋の屋＝餘り巧まずに面白い光景を、咏んだ句である。

東　魚＝「門を出て行」が働いてゐる點であるが、キワドイ點でもある。

（427）　乞食の壁もあたり狂言

秋の屋＝乞食の壁とは、乞食小屋の壁のこと歟、歌舞伎の狂言を咏んたものであらう。

東　魚＝莚で圍つた小屋掛け芝居を、乞食の壁などと奇警に云つたのではなからうか。そんなのにも、一つばし當り狂言があるとの意かと思ふ。

省　二＝乞食の壁が、判つきりせぬ感がある。

（428）　よい中は人形よりも靜也

秋の屋＝二人並んだ處は、内裡雛やうであり、互に顏を見合つてにこ〳〵して居る而已で、至極靜肅なのである。

東　魚＝上品なウブな二人が想像される。句法説明的な點はあるが、佳い句だと思ふ。

省　二＝「靜也」に對し、「よりも」と言ひきらざるを得なかつたのであらう。

（429）　めつたにはねる五奉行の馬

省　二＝諸政を五分し、重大事件は合議にして五重臣が執行した。馬がはねるのを以て、奉行の權勢を現して居る。

秋の屋＝五奉行といふのは、豊臣時代に置かれたものであらう、德川時代には五奉行の名目は無いと思ふ。

東　魚＝「めつた」は無闇矢鱈にの意。

省　二＝秀吉の桃山時代の制。大老、參與の次ぎは、前田玄以、增田長盛、長束正監、淺野長政、石田三成等を五奉行となす。

（430）　神圍にあたる聟は不器量

省　二＝神樣もいたづらだ、イヤ聟からいへば、神樣は公平無私かもしれぬ。―（似た者夫婦あり、似ぬ者夫婦あり、神業の有難さよ）。

秋の屋＝神は正直で決していたづらでは無い。不器量なるが故に身が持てゝ、結局は家内安全である。

東　魚＝皮肉なものである、と微苦笑の心持であらう。

（431）　聞干た跡のつまらぬひのへ午

省　二＝丙午の迷信は、男にも言はれたのであるが、女の方として一般に通用して居る。聞干は聞拔くと等しく、殘らず聞く事。よく聞いてみれば丙午だといふ。何んのことだ、だが氣の毒である。

秋の屋＝丙午を嫌忌する理由を聞いてみると、其根據が薄弱でつまらぬのである。

東　魚＝丙午を忌む理由を問ひたゞすのではなく、いつ迄も獨身でゐる譯を聞いてみたら、なンだ矢張丙午だからと云ふ丈

けの理由なのか、と云ふのであらう。

(432) 雪さへふれは女房ぬからす

省二＝「さあ雪だ出たくなつたと女房いひ」と、陣を張つて油斷せぬ。雪月花につれ、吉原に流連されては、女房の面目にも係る。

秋の屋＝遠き慮無ければ、必ず近き憂有り。

東魚＝「さあ雪だ」の句の方が面白い。附句の進行の工合でかうした調子の句になつたのであらうが、口調があんまり感心出來ない。

(433) 冬のすかたへ戻る人の日

省二＝正月七日を人の日といふ。松の内もすぎ春氣分も一段落、松もとれる、冬の姿に立返つて、稼がねばならなくなる氣分が醸してくる。

秋の屋＝太陰暦の新年でも、春とは名のみの光景であるから門松を撤去すると、冬の姿に後戻りする。

東魚＝歡樂のあとの、一抹の佗しさが思はれる。巧みな表現と思ふ。(一面からいへば、かう云ふ云ひ方は、いやみに陷ると云はれるかもしれぬが)。

(434) 彼岸さくらを後家の喰物

省二＝彼岸櫻がさく、後家さん彼岸のお寺參どころか、お花見に氣がそれる。喰物とは大膽の表現で好い。

秋の屋＝花見が目的でなく、敵は本能寺に在りであらう。

東魚＝すば抜けた云ひ方である。

(435) 先見た物の歸る引汐

省二＝差汐に岸へ浮び上げた物を、引汐が又引返しさらつてゆく。前句なくては此句の價値を語れぬ。

秋の屋＝此の句は寫實である。

東魚＝「さき見た物」と讀ませるのであらう。

(436) 輕業へ殘りすくなく日があたり

省二＝高く足かけした輕業小屋へ、夕陽があたりだす。終りに進み客も段々出てゆく。「輕業へ柳絞に日が當り」

秋の屋＝看客は殘り尠くなり、はや閉場に近い薄暮の光景であらう。昔の輕業の小屋には、高い櫓のやうな物が建てゝ有つたを、描き出した處が敬服させられる。

東魚＝輕業といふ賑やかなものを捉へて、逆に哀愁の氣分を、描き出した處が敬服させられる。

(437) 九十九兩は駕舁の損

省二＝?。君を思へば徒歩跣足などとはあるけれ共、深草少將の一件か。

秋の屋＝他に解釋があらう。深草少將とは思はれない。

東魚＝客の忘れた百兩包みを、見付けて返した駕舁が、其

禮に一兩貰らつたのであらう。丸々猫ばゞきめれは百兩の儲けだが九十九兩損したと洒落て云つたのであらう。

省　二＝正直運轉手ならの先例ですね。一面白い内容の咏みこなしとはなる。類句が欲しい。

(438)　**生　洲　の　魚　の　耳　か　聞　へ　る**

省　二＝生簀の魚は人馴れて居る。

秋の屋＝生洲の魚であるから、人の足音を聞いて、水底に潜むといふのである。

東　魚＝奇警な云ひ現はし方と云ふ以上、神秘な氣分にまで考へ度い。好な句の一つである。

(439)　**俄　分　限　の　我　顔　に　倦　く**

省　二＝贅澤をして品位を保たうとしても、生れつき下卑た顔は、今更どうにもならぬ。成上りの悲哀。

秋の屋＝佐野次郎左衛門などは、これに當嵌る。

東　魚＝急に髪容ちを氣にしだして、矢鱈に柄にもない鏡斗見てゐるのであらう。然し蛭子氏のお説のやうなのである。

(440)　**身　の　う　ち　つ　れ　て　後　家　の　足　早**

省　二＝身の内は親類の者、或は家の者、身だしなみのよい人の噂に上らぬ後家さんだ。足早は巧。

秋の屋＝亡父の墓參か。

東　魚＝身内と云つても、姪かなんどの目下の者を連れてゐる事が想像される。

(441)　**船　頭　の　闇　を　つ　か　ん　で　蚊　遣　り　艸**

秋の屋＝泊舟の胴の間に燈も點さず、船頭が暗闇の中で蚊遣草を、火鉢に掴みこむといふのである。

東　魚＝岸の草を、闇から手當りにまかせて、むしるのではなからうか。

省　二＝岸の草と迄は考へなかつた。蚊遣草の用意はしてあつたものと思つてゐた。「闇をつかんで」が句趣だ。

(442)　**身　請　の　顔　を　村　の　眠　さ　ま　し**

秋の屋＝田舍の大盡が、江戸(に限らぬが)から身受して連れて來た女の顔は、一村の耳目を聳動させる。

東　魚＝「村の眠さまし」は面白い表現である。村だけに可笑しさがある。

省　二＝美しい容姿、且つは事の意外なるに驚き、噂とり〳〵。

(443)　**我　内　で　評　判　に　合　肘　ま　く　ら**

秋の屋＝曲肱而枕之、樂亦在其中矣で、物見遊山にも行かず吉原の噂などに耳をも傾けず、青表紙ばかり讀んで居るので、家内中の評判になると云ふのである。

東　魚＝「評判に合」は世評通りにの意か。何かと噂されると云ふ意か、充分判明しない。或は家へ歸つてくると思へば肘枕で直ぐねる。何れおつかれ筋だらうなどと云はれる。道樂者かも知れない。

省　二＝評議される事。「肘枕」が家内で批判される。肘枕の内容が色々推測したくない。

（444）　**匂ふ物皆追詰て菊の花**

秋の屋＝此花開後更無花といふ詩句の如く、菊は百花の最後に咲くものであるから、多くの匂ふもの即百花を追詰めといふのであらう。

東　魚＝前説通りと思ふ。「追詰て」が面白い現し方である。美しいものを求める心が、菊の花に集中された心持ちが、よく出てゐる。

省　二＝キクは窮り盡くの謂から出たといふ。

（445）　**二度子おろしに逢ふてはなし**

秋の屋＝一回は實行したけれども、それに懲りて二回とは行はぬと云ふの歎。

東　魚＝二度と中條に逢ふと云ふ次第ではなし、何もきまりを悪がる事はないと云ふのであらう。「逢ふ」は「あはふ」と讀むのであらう。

省　二＝「ではなし」と濁つて居れば判り易い。「中條へ五ツ月置いて同じ顏」などの事もありはするが。

（446）　**別霜人の奉公の跡を行**

秋の屋＝八十八夜に降る霜を「別霜」といふが、奉公人の出代の三月五日とは、其日が合致せず、何とも解し難い句だ。

東　魚＝「奉公」は「つとめ」とでも讀ますのか。句意は解しかねる。江戸へ奉公に出た友を思つて、彼が通つて行つた街道、恰も別霜の置いた道を行くとでも云ふのであらうか。

省　二＝難解句。友達が奉公の決心をして、旅立ちするのを送つたのではなからうか。別霜は背景となる。

家傳藥　王黃華

主治効能

肋膜、胃腸、神經痛、
リヨウマチ、ぜんそく、

藥價　三日分　壹圓四十錢
七日分　貳圓八十錢

發賣元　上瀧實行堂

大阪市旭區鳴野町五六九
電話（94）東三九一一番

明治以後の川柳年表

（柳誌柳書の部）

（その四）

西島○丸

（書名、誌名）	（發行年月日）	（發行所其の他）
江東川柳會第一回句集 第一號	（明治卅九年丙午十月？）	翌四十年十二月の第十五回で終、川柳江東點と改む、謄寫版、東京本所區
川柳とへなぶり（第一次）第一號	（同 十一月三日）	東京牛込揚場町讀賣同好會發行、同好の生れ鱗り、二號で終
滑稽文學（第一次）第一號	（明治四十年丁未一月一日）	東京本郷區湯島天神町滑稽文學社發行、川柳とへなぶり第三號に當る、同年七月七册目を出して、翌月より川柳とへなぶりの名に戻る
讀賣新聞川柳欄 第一號	（同 三月二十日）	選者朴山人退き、窪田而笑子之に代る
柳 第一號	（同 四月十五日）	神戸、楠町神戸柳樽寺發行、菊版三十頁、休刊期不明
略解時代狂句選 全一册	（同 四月廿八日）	東京日本橋區博文館發行、幸堂得知著、活版横長本
竹馬 第一號	（同 春）	東京鶯柳會發行、謄寫版、川柳俳句冠句合載
誹風江戸紫 全一册	（同 六月一日）	東京下谷區盛光堂發行、今田猛象撰
思葉舟 第一輯	（同 六月十日）	東京京橋銀座、柴舟發行所、四六半截十八頁
川柳とへなぶり（第二次）一の八號	（同 八月十日）	滑稽文學改題、號數は滑稽文學のを其儘使用、發行所牛込揚場町十三 田而笑子方（四十二年六月三の六まで）

江東川柳會臨時會句集　全一冊（同八　月）　謄寫版六頁、東京市本所區

西洋柳　櫓　全一冊（同十一月六日）　譯註勝俣銓吉郎、有朋堂、名のみのもの

新川柳　第一輯（明治四十一年戊申一月一日）　横濱市中村町川柳社發行、大正四年一月の第八十五號より「短詩」と改題す

川柳江東點（江東川柳會募集川柳句集）（同一　月）　江東川柳會句集の改題、翌年三月號で終？

俳風やなぎ樽　卷の一（同六月廿八日）　東京日本橋橋南座發行、太田信義編輯、初編――十七編

土團子　第一（同八月一日）　大阪西區土團子發行所發行、菊半横綴廿頁、葉柳休刊のつなぎ

萬朝報投稿者狂句互選大會豫選句集（同十月六日）　東京、京橋萬友會、全一冊、菊半截横綴二十四頁

十世川柳家集　全一冊（同秋、月日不明）　四六横綴、和紙十一葉

綾志野　第一號（同十一月一日）　東京本所外手町綾志野川柳會發行、美濃四つ折謄寫版廿頁、五號にて廢刊、讀賣派より分れて綾志野派起る

洞海　第一號（同月日不明）　今の八幡市槻田、三ヶ年繼續發行謄寫版

俳句と川柳　全一冊（明治四十三年己酉二月五日）　編者川原閑舟、選者西田當百

柳道　第一號（同二　月）　大阪東區瓦町大阪柳風社發行、二號で廢刊、十六頁

一月、十世川柳、隱退して深川洲崎拝天町の酒屋高崎屋の小林昇旭十一世となる

江戸文學　第一編（同三月廿八日）　東京、本郷江戸文學社發行、十月七編を出して廢刊

矢車　第一號（同四月二十日）　東京、芝區三田矢車發行所、四十四年十一月三十一號で廢刊

紅薔薇　第六號（同　四月二十日）　東京牛込早稻田紅薔薇會發行、菊判、每月一回廿日發行

川柳獅子頭　第一號（同　五月五日）　東京日本橋村松町獅子頭發行所、四十四年八月三の八號で休刊

五月十六日、大阪の六厘坊逝く、小島善右衛門、二十二才

古句短評鹿鳴庵句集　全一冊（同　五月廿八日）　前橋市新七十七江原三郎著（川柳社同人鹿鳴庵）發行、菊半截一六六頁

若葉集　全一冊（同　六月十五日）　松山市北京町八十、柳絮會發行、菊半横六十頁、外に附錄廿四頁

滑稽文學（第二次）　三の七處（同　七　月）　第二次川柳とへなぶりの改題　四十四年七月通卷五十六號で終刊

評釋川柳雜句選　全一冊（同　七月十三日）　東京日本橋如山堂、秋の屋主人著、明治三十三年文祿堂の「川柳雜句釋」と同一書、袖珍本、大正十年評釋川柳妙句選と化ける

分類評釋川柳名句選　全一冊（同　七月十三日）　同上書店發行、島崎松學著、明治三十八年同人の同書同店から出てゐる

青柳　第一號（同　九　月）　岐阜縣安八郡大藪町（美濃大國）青柳會發行、菊半截

春雨　第一號（同　月日不明）　横濱市青木町二五五高木方春雨會發行、謄寫版、好風等肝煎

ばん茶　第六號（同　十一月一日）　東京神田佐柄木町サ一秦十筽子方番茶連（東京川柳社支部）發行

柳行李　第一編（同十一月十一日）　門司市九州川柳社、岩田鄉左衞門編輯、菊四十四、二號で休刊

はがき塚　第一編（同十二月二十日）　東京京橋區萬友會發行、清水三友編、四六半二五四頁

パーセント　第一號（明治四十三年庚戌月日不明）　謄寫版の「洞海」活字となりてパーセントと改題今の八幡市槻田パーセント倶樂部發行、後に「鵡」と改題す

煎茶錄　第一號（同　一　月）　伊豫東宇知郡高山村二宮蛙念奥田撫子により發行後松山藤井藤吉郎の手に移り小倉より「響」と改題發行、十一月六號と出し廢刊

明　和　第一號（同二月一日）横濱宮川町一の一五岩井方毎電寸句社横濱支部明和會發行、岩井阜山編輯、謄寫版、休刊期不明

俳風柳多留　第一編（同三月）横濱中村町横濱川柳社内柳多留醸刻會發行、四編で終る

古川柳選句集　全一册（同三月十日）東京京橋共盛活版所印刷、古谷洗濱編、小型二十頁

友千鳥（萬朝報文藝欄開始滿十年記念句集）（同四月九日）東京京橋萬友會發行、菊半横

互選　全一册（同四月十日）東京日本橋區古谷洗濱主催、菊半横綴

滑稽文學川柳名句集　全一册（同四月十五日）東京淺草國華堂、小林紫軒編、小本、卅九年發行の物に等し

川柳歳事記　全一册（同七月五日）東京京橋讀賣新聞日就社發行、安藤幻怪坊著、大正十年深川山下東陽堂より再版刊行さる

白日　全一册（同八月二十日）大阪市西區九條町短詩社發行、川柳は一部分

はがき塚　第二編（同十月五日）東京、京橋區萬友會發行、清水三友編、小本

末摘花　全一册（同十月）東京、牛込滑稽文學社發行、醸刻出版、所謂而笑子本

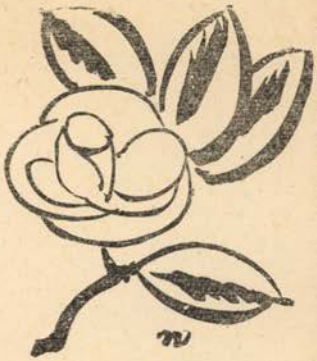
柳　第一號（同十月廿五日）名古屋市新榮町中京川柳社、大正元年十月廿五日終刊、謄寫版同年十一月「鯱鉾」と改題

柳樽第一輯（袖珍文庫第十五）　全一册（同十月廿八日）東京、神田三敎書院發行、初編――六編、所謂いてふ本、誤多し小本羯色表紙

柳樽第二輯（袖珍文庫第廿五）　全一册（同十二月廿八日）同上　七編――十二編、同上

番茶　第一號（同月日不明）今治市、讀賣川柳研究會支部發行、三號で終

柳風新報　第一號（明治四十四年辛亥月日不詳）東京深川洲崎辨天町昇旭方柳風社、四十五年二月廿日第四號を出して廢刊



川柳塔

路郎選

山本雨迷

いとしみのひたいかなしむ夜の枕
美くしい女となりすましたる影に添ふ
世辭に馴れた言葉を吐くは何の唇
忙がしい鮨の宙返りは本能だときめた
風はぐちとなり地を拂ひつゝ過ぎん

増位汀柳

人待てば待つ人に似た人多し
方便の嘘とは云へど悲しかり
妾宅へ通ふ定期を買ふ身分
ひとり酒ほんのり醉ふて眠くなり
掟には叛けず叛く二人なり

西田艸樂

ステツキを藝妓がとつて先に乘り

左脚病む

考へて見れば手紙で濟む用事
大掃除磨けば通る錢が出る
青空の下行く鼻の乾きかな
よいとこへ來てくれた重い荷が屆き
古い借圖々しいのでないけれど
庭へ出て話相手のない舞妓
掃溜に芽を吹いて玉葱どうする氣
おもちや箱も一度は錐を探して見
風上に當る二階で鰯燒く
初夏のほの〳〵白き百合の夢
入學の光るナイフも嬉しくて
あざむくと知らずキツスの甘かりき

○　竹内機見女

個人主義母は目覺めたばかりなり

春なれば

出勤へこの頃本はおいてゆき

白英さまの結婚を祝して

新綠のかげへあなたと呼びかける

八瀨大原の里にて

吸ふ息もみどりの色の八瀨の里

大原女の荷のかちすぎる姿かや

寂光院にて

雨に來て苔の青きにすべるなり

御鳥羽、順德天皇御陵

音無の瀧のひゞきと翠嵐と

吉田水車

冗談が今更こわく轉任し

大阪のネオンガ惡く寢るとせう

大阪はあの邊らしいビルの窓

轉任の汽車から櫻見とゞける

岡田某人

へた〳〵と藝者の疲れ切るおぼろ

履歴書を預け放しで春が冷え

藝術を解く淋しき繕の人

この人も識か定期の買戻し

屋外の訓辭背中を蟲が這ひ

旅にて

旅愁かや少し煙草を喫ひすぎる

伏木峠

こゝからが豊後フオードの砂ぼこり

福田山雨樓氏本省赴任を送る

別れてもやはり茶碗で喰ふ世界

奥野禿山

おもしろい男まともにたのまれる

死ぬ迄は生きねばならぬ世辭も要り

女房になつても惚れたとは言はず

目障りになる小使のインテリー

受付の机悔の聞き流し

後藤青兒

文明の轟く土へ親しめず
法律をカヂル我が子と信じきり
骨上げへ春の日和の麗ら過ぎ
長男が產れ兩手で受けて居る
教員も人間だつた淺ましさ
オムツ干す手へルビーだの眞珠だの
いら立てば馬糞を卷いた風が過ぎ
へつらへば蜻蛉が笑ふなと思ひ

福田浮鬼

療養所こんなに早い蚊張となり
耳糞を大きがつてるうらゝかさ
はかなさはゲンノショーコを飲むこゝろ
安物の文鳥にして春の色
アメリカと云ふ感じする雲が浮き
死なぬものあらねば安く血を喀きぬ
生きてゐる證據血が出る熱が出る

平井春光

親與三郎結婚

萬歳師然と竝んだ御兩人

私も結婚

結婚の費用を母に甘えて見
高砂へ涙ぐめるは妻の母
公設は二人竝べぬ人通り
執達吏の耳柔らげた鳩時計
初妻に引止められた射的場

植山九天

動物園

家庭連れリタの生活を見とれてた

伯母死後の伯父へ

出來すぎの燭に燈明またゝいて
代表として葬式に待たされる

三月二十一日

嵐山は凍えてボート乘るところ

喜多春秋

おだてねばならず使ふも亦難し
連れて歩るける女ではなし子を産ませ
水の持つ明るさ夜は月一つ
大笑ひ屑屋五錢に買ふといふ
沈んたやうな停車へ雨が降つてゐる
帽子の名川村太郎といふ子だな

曾我部宵明

座蒲團はやけきつてゐる蠅の戀
蛙の聲に村の灯田の灯
死に度いと云ふ唇へ紅を塗り
三角よ幾何よ疲れた履歴書よ
電線へさつきの空がひらけゆく

江戸みつる

追ふ影はジヤズとネオンの中に消へ
玩具屋の人形のやうなレビューの娘
使用人金利なんどと考へず

西いわを

貧しければ子を限りなく愛し
債鬼から逃れ遊覽船に乘り
兄弟を紹介するも社交術
妾宅に笑ひ聲して戸を閉める

銀閣寺にて五月四日

銀閣寺上海からの客もあり

市塲沒食子

靴の艶臨時雇と誰がしろ
收賄の椅子へ次席がせり上り
妻よ子よ許せよ花はもう散るに
葉櫻よ隣りもうちもつはりです
同姓が縁で養子に來て貰ひ

大西八歩

良心にちとせめられる金を貯め
眞實を語る日の空廣く見る
同じとこ二度彈いてゐる畫の三味

水谷鮎美

白百合のりんかく君のかほに似る
ほゝぼねはぶろれたりやのものでした
落椿痴人の愛の變り果て
夕陽眞赤だにわとりとにんげんと

水車氏の榮轉を祝ふ

そろばんのたしかな君の折鞄

西村明珠

先生の筆法で身がかたくなり
集金屋拂ひの惡るい町で暮れ
力ある丈けで男のみぢめなる
人間は遊び噴水働らけり
佛心の靜かにつむるばかりなり

須崎豆秋

金が欲しい欲しいと聽診器へひゞき
國防婦人、煙草一本頂戴な
風ひいたこともあんたのせいにされ

姫田夕鐘

雲雀ひばり君の天下になつたのね
奥座敷の暗さが知れる紺のれん
興奮をさせるに足らぬ金でした

長男誕生す

どこまでも俺に似た子が生れ來し

熊谷紅

櫻干母の疲れた手で燒かれ
硝子ふきつく〳〵初夏の陽に染まり
酒呑んでゐる間に運を取り逃がし

村松夢裡

そんな氣でないが落目の淋しさよ
ひしと抱く兒は感傷の瞳に出遇ひ
火事はどこだと一人丈け走り

岡崎祥月

珍客の馳走に白魚高い事
流行妓貞操丈はよく守り
壁一重隣は拳のけいこなり

明石柳次

宿下駄のまんま祭の人となる
淋しい日算盤なんかよしませう
用のない顔へネオンの色かわり

荒井英賀夫

所在なさ女工募集が目にとまり
葬具屋に今日も花輪が賣れて行く
金のない人に情のありすぎて

中澤濁水

留守でなくどしんどしんと降りてくる
書き入つてゐる間笑はぬ告知板
しみ〴〵と亡き母に似る父の客

尾添好郎

大きく笑へば眉毛へ春の風
春の眼のかすむ夕月思ひゐる

青木史呂

床の間もない家にある將棋盤
神經質時計の音を遠ざける

町田承春

釋放の喰まばゆき日本晴
御芽出度妻の異狀へ春麗
病床を見舞ふ便りへ花しきり

尼絲之助

新絲はひかり折詰の顏を吹く
デーばかり多くつかれた五月の陽
呑み足らぬ顏で老妓に言ひ敗ける

平井與三郎

一升壜さげてゆくぞと驚かされ
新世帶蠅一匹も殺されず

北山悟郎

郵便の減るも寂しきものの中
くず拾ひ出來る身分は幸福だ

越智虹一郎

社會性は社會性である女の唇が紅い
少女等は少女等歌ふ唄がある職業的に

宮岡白峯

菜の花へ後ろ向く娘の蒼白し
物干しと植木とならぶのも借家

三鴨美笑

許嫁あまり親しくしてはゐず
菜葉賣る車に子供乘せてあり

石曾根民郎

孫抱いて雲のゆくへを眺めやる
曇り日もよし輿入れの沙汰となり

岩崎柳路

比叡山にて

比叡山兩手を合すとこばかり

粒々集

前田五健

人絹美女の慾は其塲きり
髪結び食へぬ時代となりにけり
青葉若葉を突切つて瀑
牛の仔のまだ勞働を知らぬ脚

富士野鞍馬

登別温泉

登別湯氣の中なる人通り

亡洋ちやんを弔ふ

五月にはあの子のものも並べとけ

亡中島綾子嬢を弔ふ

極樂はつひそこだつた二十一

寶

氣の毒なことに家寶は僞物なり

長崎柳秀

要するに友は友なり金は金
顎のせる炬燵は思案する姿
風呂へ往く腹のきまらぬ冬の雨
繕うた足袋が淋しい秋の竿
我が影を知らず倦怠妻をせめ
枕替え布團を換へて病み續け
勸める娘學ぶ娘朝の電車内

月評　街の高臺

西田艸樂
吉田水車

艸樂・水車兩氏が別箇に批評されたものを併出した。（編輯局）

（一）比喩と形容

今春久し振りに歸省して、村の禪寺を訪ふた。和尚は臨濟派の修養を積んだ人だけに、飄逸な處であつ白た面白く話を聽いた。君は川柳やつてゐられか、面白いものを見せやうと取出して來られたのが、新らしく表裝した一軸で、見ると、蛸の頭とも、岩とも、拙い出來の壺を伏せたとも知れぬ、線の太い墨繪が書いてあつて、その上に、

面壁の祖師の姿を尋ぬれば、八幡の畑の××××、茄子か南瓜か

勝手に見る。

伏字の號は忘れたが、狂歌とも何とも知れぬ歌が書いてあつて、南天棒と落款がある。

その繪が達磨の頭とはどうしても見えず、といつて茄子や、南瓜の類で決してない。得體の知れぬものであつたが、兎も角見てゐると何かを悟れと迫まられる樣な感じがして來たが、結局禪で云ふ枯華微笑なんて事が俗人の自分に解る筈がないと同じだと諦めた。

新興川柳だといつて、全く茄子か南瓜か見るものゝ勝手だと言はぬばかりの句が流行する。詩には自然作者と讀者の間に默契があるから或る程度酌みとれはするけれど、感情の端くれを抽象的な文字で書き上げたゞけでは感心せぬと思ふ、禪の不立文字といつた風なものと藝術は違はなければならない。

藝術は人を動かすよさと、樂しますよさが主たる目的であらう。自分だけが勝手に感情の虜になつて、如何に敏感な味を出したつもりでも人に通用せれば結局感動を與へる事も、娛ましめる事も出來ない。

新興川柳もいゝ、感覺の鋭いのも結構である。併し高遠な眞理が

巧みな比喩で悟れる樣に、川柳なんか、そういつた處に面白味があるので、特に六ヶ敷い言葉を使つたり、氣取つた風な句が詩だと喜んでゐる人々には私の主張は緣がないと思ふ。今月の月評は一般の句評は水車氏に任じた、私は比喩と形容を語つて見やうと思ふ。

寶塚おもちやのやうな人とあひ　靜太
バットの灰惱み疲れたやうに落ち　天風
桑の花が村の平和のやうに咲き　南星

以上近作柳樽

善人の證據のやうに出世せず　某人
のうれんのやうな男で味方なり　春秋

以上川柳塔

何々のやうに、如く、氣味があり、等々、尙ほ計量的に云つた、程に、從ひその他種々比喩的手法がある中に、最も多く使はれる、「やうに」の手法が陳いとか、常套的だとか從來の評論家が筆にした事があるが、「やうに」といふ言葉に陳い新らしいはない。要するに比喩の內容の價値如何が問題なので、一つのものを他の物に比較して述べるのであるから、惡るからう筈はないのである。併し此の場合、抽象的內容を形象的比喩によつて、繪畫化する所に一層効果的であるが、右の句例に於て、人形、のれんは形象化で、疲れた、平和證據のやうには抽象化である。それが何れがいゝかとは據かに斷定出來ないが、人形とか、のれんとか形のある比喩法には直に繪畫的感覺を喚び起して効果を揚げ得るが、平和、疲れた、證據といつたものには、勿論作者の主觀であるから否定は出來ないが、該切さが問題となつて、そこにデリケートな味があると云ひながら、迫力とか感銘とは確かに乏しくなるのは事實で、私は此の事實に就て茲に引例の違はないが數多の例によつて比較した事がある。

比喩の一種に暗喩なるものがある。それは二つのもの甲は直ちに乙だといふので、「よく泳ぐ者は蛙だ」と言ひ張る、既に、やうに、如くにの冗語が省かれて、一層句の內容を充實し、引立たせるのである。

こんな椅子へ蛙になつてゐてやらう　有爲郎
かあちやんのしりつきむしでございます　春秋

此の二句がそれで、その巧みさが直ちに受取り得る。この手法を學ぶには武玉川十四字詩を讀めばよく出て來る。詩型が短くなる程必要な手法である。

前垂の大阪辨の眼のはやさ　鮎美

換名法の手法を用ひた句である。換名法とは、人數が足らぬといふ場合、手が足らぬと言ふ樣に、食物といふ場合パンといひ換へるのである。大阪人を大阪辨としたのが換名で實際を言へば「辨の眼が早い」とは文法上あり得ないが詩の手法として許される。許されるばかりでなく、前垂の大阪辨の「人の」を省略し、辨とした丈けで簡潔で、情景まで現はれる効果的な用語法なのである。此の種の手法は五月號に於て此の句一句より見なかつた。

以上縱述する處を參酌して、粒々集の森東魚氏の句を見られたい

柳風スポーツ　森東魚

劫盲けのかたちフアウルで打取られ　暗喩
はり倒す樣に審判アウトにし　比喩
コンパスの愚痴は國際レースなり　換名
手ほどきに眼鏡が飛んで弓になり　暗喩

私は今月の月評に右の樣な手法論を書いたのは實に東魚氏のあまりにも老巧な手法に感じ入つた爲に、讀者と共に學びたいのである。詩の實際の價値が、形態より內容にある事は論を俟たない。併しあらゆる手法、叙法を研究し然る後立派な內容を盛るべきで、每月創作欄を見てゐると、手法の研究の足らない句を非常に多く見るのである。評論が講述が判らぬ事に終つたが、初心の人々にでも多少共參考となれば幸である。（艸樂）

（二）

一二丁浮氣封じに送られる　艸樂

送られたのが一二丁で浮氣封じのつもりだからおもしろい、作者の飄逸さがうかゞへへる、一二丁が利いてみやう。

自轉車で二號のとこへ廻るなり　豆秋

とかく繁雜にさへすれば氣の濟む社會で、こんな世界もある、會ふのは腰掛か、自轉車で、か此句の見付けである、眞面目な不眞面目も許されていゝやうな氣がする。

大タクに圍はれて出る果太鼓　柳路

大阪に居馴れては此感じはあつても句は出ない、寫生句としてはそつのないローカルカラーに滿ちた句である、先輩の句をとり上げるには未熟であるにしても此句に作者の感激があるやうに私も浸り得たのに變りはない。

善人の證據のやうに出世せず　某人

これも觀方であらふ上五中七の冗漫さをなんとか救へたらと思ふ、主觀にしても客觀にしても啖呵となつては價値は半減する諦らめも警戒すべきだ。

どこぞよいとこはないかと勸めてゐ　明珠

人の花は赤い、外に眼もくれなかつた昔が戀しからふ、取材は決して新らしくはないが、眞ッ向から斬り下ろした作者の態度に狂ひはなからふ。

屋臺ずし今度食ふのへ眼を落し　明珠

喰ふ時の無念無想、咽咽喉元過ぎればもう次ぎを逐ふ、蓋し一種の時想への警句か。

摘草の鼻のさきなる春の水　鮎美

清澄な句である、草の數々を追ふ前に先づさゝやかな流れに心すべきである、作者らしい纖細な見付けがいゝ。此句と前後した他の三句にも何か知ら連鎖的なものが感じられる。

洋ちやんを悼む

いゝお父ちやんの手を離しましたね　夕鐘

前書の句であるが、いゝ表現である、たくまないうまさがある、此種の句はともすればこじ付けになるが、感覺的な斯ふした行き方も好ましい。

西洋菓子みたいな女句はせる　新水

女に共通な化粧料から來る句は一種甘美なものがある此句は何か童心にふれてうつくしい感じがする、大阪訛の「みたいな」ではじめて作者の言はんとするもの言ひ得てゐる。

給料日改札口で辷りかけ　紅

句風の如何は別として、紅調とでも言ふべき作風がある、作者自身コッケイの心算でなくとも句の上から見れば如何にも冗談のやうに受取れる、しかし笑ひを煎じ詰めれば遂に涙となる。（水車）

東京から

福田山雨樓

住みなれた大阪と別れて、多年憧れてゐた東京へ轉勤することになり、喜悲交々の心持ちを抱いて、毎日關西の柳友諸兄のお姿を思ひ浮べ乍ら、暮しております。只今横濱市の郊外保土ケ谷と云ふ所に住まつておりますが、健康地なので土地は變りましたけれども、一同達者でゐることを感謝してゐます。

これからは大いに中央柳壇の空氣を吸つて一層川柳に精進したいと思つております。そして光輝ある「川柳雜誌」の歴史を更に振ひ起すやう、生涯微力を捧げ決心でおります。どうか今後私の至らない點はどし〳〵と御叱正御鞭韃の程お願ひ致します。

で此際過去のことは一切申上げません總ては今後にあり明日にあるのでありますから、將來の向上發展について聊か感じましたことを申上げまして、御批判を仰ぎたいと思ひます。

○

一、中央柳壇と地方柳壇とがもつと密接に折衝し、交渉を持つこと。も一つ云へば柳壇が全國的につながりを持つことを要望したいと思ひます。殊に東京へ參つて其の感を強くしたのでありまして、東京の柳人の言動は全國に響くやうにあらねばならぬし、地方の問題も打てば響くやうに東京へ應へねばウソだと思ひます。そして全國柳壇が一つの大きな有機體をなして進みたいものだと考へます。恰度國防と云ふ問題が軍部總體の神經をなしてゐるやうに、柳壇の神經が柳壇それ自體の問題に迄集中されるべきであると思ひます。お互ひに何處でどんな事が起らうと、知らぬ顔をしてゐるやうなことは決して柳壇の進むべき道ではないと考へます。

尤も東京を目して中央々々と申しましたが、これは寧ろ關西と對比して關東と云つた方がよいかも知れません。要は東西と云はず全國的の交流を望む本意なのであります。

○

二、批評を盛んにしたいこと。この批評と云ふ仕事はその仕方の正否、强弱と、その批評を受ける側の教養、襟度等の關係から、或ひは感情の衝突となつたり、或ひは樂屋賞めに終つたりする場合がないでもありませんが、よき批判なくしては到底伸び且つ進むものではないと思ひます。それで今後は出來るだけ相互批評の旺盛ならんことを望んで止みません。

批評が盛んになれば創作が衰へると云ふやうなことは、全く杞憂に過ぎない臆說だと信じます。

悪い傾向や間違つた進み方に對して、正しい方向と理論を主張し反駁し匡正することはお互ひの義務であるばかりでなく、柳壇の全國的交流を望む上から云へば確かに一つの連帶責任でなくてはならぬと思ひます。

川柳二十日會にはさなだでも出席出來ます、毎月二十日の午後から夜にかけて不朽洞！南海線玉出驛西三丁キング喫茶店！で路郎圭幹を中心に語る會です、會費の定めはありません。

「コーヒ、〳〵〳〵」と心の中でくりかへし乍らキングに飛び込む。灯のともるにはまだ早やい五時すぎ、Aテーブルに學生二人靜かに話し合ふてゐる外柳友の姿は見えない。いま史呂さんが歸られたとの事。奥さんが百合の花束をかゝえて歸られた。香りの高い白百合の中に一輪姫百合の交つてゐるのもれしい。お花を見ながら奥さんとホツトコーヒをすゝる。畫のつかれがこれですくはれたやうだ日本茶と、紅茶やコーヒのもたらす氣分のおちつきについて話合ふ。何時の間にか灯がついてゐた。柳友の方は今頃夕餉をたしんでゐる事だらう。まづ結婚されたばかりの與三郎さん節子さんのスキートホームを想像する。この頃節子さんは健康を害してゐられるそうだから今夜もこられないだらうと思ふと淋しい。お次は夕鐘さん、あの方は食事の時はマダムが三味線でサービスして下さるそうだから、まだ〳〵見える筈がない。水車さんは名古屋、山雨樓さんは東京に居られるのだから、お顔のそろはぬのが齒のぬけたさみしさだ。綠雨さんは非番でないのかしらなどゝ考へてゐる中に、そつと見たのは汀柳さんだつた。見れば水ぐすりをもつて居られるあの方にふさわしい感じだ　かう申上げては失禮だが、これは私の好きなタイプの一つ。體つきが私の長兄そつくりなのも一寸なつかしい。人並はづれて高い兄さんは弟妹ののびる春を吸引してしまつたものだらう。汀柳さんを見ると兄さんに會つてやうな氣がしてならないのでつい奈那ちやんがBテーブルの私の前に來て、啄木の「東海の小島の磯の白砂に！……」の句が好きだと句箋に乙女の感傷を追ふてゐる姿も好ましい。艸樂さんが足ないたわり乍ら御入來。今日は皆少しづゝ工合がわるい日らしい。實は私も右手の小指をいためてゐるので、この二三日ペンをもつのにも、口紅を使ふ時にも不自由で仕方がない。少しして禿山さんが出席これで、ごうやら人數も揃ふて來たやうだが、皆ひどく眞面目なのはアルコールが不足してゐるためかも知れない。（機見女）

左足を病んで少々歩行の困難あるを押して出かける。汀柳、機見女、葭乃夫人鼎座して私の噂の最中へ飛込んだと見える。早速今日の相撲吟の抽籤を引き當てると「少年」とある。冷いコーヒを一杯よばれて雜談の仲間入り。清々しい初夏の夕べ、喋べりたい事を喋べり、好きなフルツを喰べ、社内の話から世間話をとりとめもなく聞いてゐると何時か何の憂苦もない至極平和な雰圍氣に包まれた幸福感に浸れるのが二十日會の特徴であるそこへ笑ひの國の使者のやうに禿山君が這入つて來る。直ぐに籤を引かされてゐる。君ナニヤ？口笛やエヘヽ顔面神經を踊らす「禿山は何時も醉ふてる顔を出し」今夜に限つて至極神妙な處が又面白い。とやかくしてゐると、ヤア！と主幹のお戻り。一寸どこかで一献きこしめた顔附。畫間には史呂君が來たそうである。キングの樂書帳に二十日會皆勤者と大きく巾をとつてゐる男だ。その相棒の與三郎君がシンガリを承つてのつこり顔を出す。今日の二十日會は史呂、與三郎の棒組が後先を擔いだ形だ。みんな句が出來たら出してや。（艸樂）

路郎選

口笛

口笛に答へありそうな朧月　禿山

○口笛を吹けど口笛までふるえ　汀柳

夏の宵

○夕顔へ話しかければ露がおち　機見女

打水の宵へ硝子の皿が出る　艸樂

少年

少年の域を脱せずバツト喫ふ　葭乃

○用事だけ傳へ少年どこへ行た　艸樂

悪運

悪運が盡きた所で幕になり　史呂

○悪運と云はれてもよい懐手　汀柳

街に住めば

高橋かほる

「厩のたより……」とか「雪暮夜入入谷畦道」だの芝居の藝題から受ける感じが嬉しびて私は好きですのに色彩間苞豆は嬉しく有りません…今度も歌舞伎座の五代目追善興行に此の藝題をカマケに場内の擴聲機を通じて、イロモヨウチヨツトカリマメと聞かされてほんまにけつたいな藝題やなと思ひました。

木曜會餘談

平井與三郎

空堀通りから事務所に行く途の左側に盲學校がある。

五體揃つた人間が遊んでゐる世の中に、目の不自由ながらも、處世の仕事を敎へ與へようとしてゐるのだ。恐らく彼等には見えないだらうが、校庭の眞中に、蒼々として銀杏が午後の日を照りかへしてゐる。授業が終つたかして、目あきに手を引かれて歸つてゆく。たまに一人で出て來ると、足さぐりで輕くステッキを持ち乍ら、石段を下りて來る。大部分眼鏡を掛けてゐるが、申し合せたやうに黑眼鏡だ。黑ナンテ憂鬱だらうなあと思つた併し、考へて見てると彼等の目が見えない事を忘れてゐた。

× × ×

上本町三丁目で正午の笛をきいた。停留所から事務所まで五分とかゝらない。

來訪の意を傳えると、汀柳さんは朝報へ出社されて、木曜會は夕方からだとお仰つた。二十日會の樣な氣持で來たので、此處は喫茶店でないので、僕等にはたちが惡るい。

折角來たので無理を云つて上らして貰ふ奥樣も顏馴染なので書齋へ通して下さつた。ソファーに圍まれたテーブルの上には各地の柳誌が積まれてある、川柳に關する著書が書棚にぎつちり詰つてゐて上に汀柳さんの寫眞が飾つてあつてなんとなく御留守とは思へない。暫らく作句してゐたが、誰も見えぬので置手紙して歸る。

× × ×

お留守ですので歸ります、机の上のお菓子喰べたかつたのですが遠慮しておきます得てして喰辛棒したつまみ食ひがあたりますから。

四・國・遍・路

松山　酒井大樓

漢書に進香と云ふ語が有る、吾が國の信仰に通ずる私は思ふ　信仰は進香に依つて濃度を增すと

○

四國八十八ヶ所の靈場を遍歷し　眞劍の心持で大師の御寶前へ心靜かに香を献じ　光明眞言を稱へる　かくて一時たり共俗念を去るそれ信仰上無意味なりとは斷じ得ない

進香に心の塵を洗ひ捨て

○

この見地から決行したのが今度の四國遍路の旅である松山の柳友に首途を祝され

松山の城と別れる遍路笠

の一句を殘して、漂然四國靈場巡場と各地川柳家訪問との信仰七分趣味三分の旅に出たのが彌生は上の八日

まだ去らぬ餘寒に遍路衿が嵩み

○

旅の第一日早や道連れの幾人

道連は大阪の人肥後の人

其の夜の宿り初めて泊る遍路宿の寂心地

金二十錢なりありがたや遍路宿

二十錢一日の煙錢にも足りぬ位の端錢にて疲れを癒す湯を沸し　朝夕の惣菜を供して寒からぬ程度の蒲團を被せ　御飯迄焚い下さる（但し米代は別）んだから如何に遍路宿の安値なるかを

安直は嘘だと思ふ遍路宿

○

四月九日　今治柳人を驚かし柳友文庫氏宅へ泊る折しも御夫人は不在　曉童兄來つて夫人の代役を務め

自炊したお蔭と誇る飯が焦げの喜劇を演じて大に持成して呉れる

妻の留守山高の型で喰ひ散し

こうした持成しも嬉しいものである

○

四國遍路に出ると　一日に七軒とかは修行せねばならぬなどの言傳へが有る、幸ひ當りに知る人は無しやつて見ようと　勇氣一番だが

報捨乞ふ鈴中々に振りも得ず

初めての修業門前拂ひ喰い

翌日からは一切願下

○

急がぬ旅氣任せの旅折しも天氣は晴朗

南無大師こゝ春光の別天地

○

傳說る殘る舊蹟は到る處にある　曰く何曰く何とこれに碑が立てゝ有る處も多い

入相のかれ惜まるゝ櫻かな（古句）

などは懷しさ一入で有るが不忘の松など有る優しき古木へ鹿爪らしき　漢詩の碑など立てるは餘り香からず

傳說の松へ漢詩の不釣合

○

此の傳說を說く寺の坊さん等の淺い認識

傳說へ當僧何も知らず居る

伊與櫻井に南朝の忠臣　昭屋義助公の墓が有る遍路の身故一遍の御回向を　念じ奉るべく參拜

忠臣の墓石餘りに慘めなるに思はず涙ぐむ

○

四國は山國で有る靈場も亦山寺が多い　海拔幾百メートルの山嶺ならず共中腹位にある寺は澤山これへ登るは　一汗も二汗もかくでも景色は格別

信仰の汗を一拭する景色

こんな所には必ず大師のお加掛水がある

息切の遍路へありがたいお水

フト聞く鶯の聲

鶯の聲南山は雪が有り

○

三月十二日　小松香園寺へ通夜をする同寺は四國靈場としてより子安大師の御靈驗に依つて其名が高い寺で有る　又子女農園を開いて產業奬勵にも努められて居る

南無子安大師へ子と子子の寫眞
開墾と慈善事業の香園寺

○

香園寺と言ほず吉祥寺と言はず昔は七堂伽藍聳へて居たが幾度かの兵燹に燒失し只僅かに本堂を殘すのみとの履歷を聞かされて見ると

御佛の力も甲斐の無い戰禍
戰禍を防ぐ御佛力は無かつたとしても
御自身で御避難ありし御本尊
はおはしますあな有がだや南無大師

○

三月十四日 西條着

加茂川の水に京都を偲ばせる
の清流を渡るとこゝが西條町川柳雜誌西條支部荒井英賀夫さんの宅を訪れ引留められる儘に御宿を頂く槍さび誌を發行して居られる氏の御奮闘に酬ゆべく西條の柳人は餘り冷淡では有るまいかと思つた

健闘へ友一人去り二人去り
唯一人頑張り通す意氣と熱
此の意氣と熱へ絕へざる友情の油を注いで下さるのが白川矢舟さん槍さび社の方に少なく共四五の柳人には御目にかゝれると樂しんで居たのが唯前記の御二人限り

柳論に酒に鼎座の更けて行き

○

三月十六日 三角寺參拜松山出發以來九日
茲に伊與の終りの札所三角寺へ參拜
三角寺伊豫へさらばをする御札
峠道別れを告げる伊與の海

○

愈讃岐地へ入つた阿讃國境海拔九三〇米の頂上に有る四國最高所の札所雲邊寺實に雲邊に聳ゆる心地ッンと上れば雲邊寺など言はれて居る難所殊に雨と風と霧

悲しさは雨と霧との雲邊寺
悲鳴又悲鳴の中の遍路笠

○

雲邊の嶮を越ゆればそこに展開される讃岐平野四國遍路の道は實によく出來〻居る一日は山一日は平野一日は海邊と云ふ風で相接する風光飽く所を知らずと云ふ有樣

ふりさけむ悲鳴を上げた雲邊寺
長閑なる景色昨日の苦を忘れ

これだから遍路は止められんのですれと
は誰かの述懷フト見る路傍の碑銘して曰く
岡田かめ女の碑と扨は市太郎ヤーイの主人
公かと思はず襟を正し

市太郎ヤーイの母の碑へ回向
人間死しても名は朽ちぬ芳名は殘したいもの
だとしみ〻〻

○

三月十九日 觀音寺參拜餘り世人に知られて居ない觀音寺町讃岐遊覽の京阪神の人々も琴平高松屋島と遊び廻られても一寸足の向難い觀音寺だがとても好い所です一覽の價値は充分

寺と宮海と山との觀音寺
琴彈の山から見へるデカイ錢

此のデカイ寛永通寶の圓周が百九十間配するに有明濱の松並木沖に伊吹の島浮び右手は城址の江甫山など賞めて居ると際限がないが

磯山に峯の松風通ひ來て涙やひくらんから琴の浦

と菅原道眞公の御歌にも有る通り通ひ來ませと……

琴彈の名の床しさもありがたし

○

海岸寺彌谷寺善通寺等々に到る處の寺々に弘法大師御七歳の御作だと云ふ御佛像がとても澤山有る

幼稚園時代佛心有る大師

又御七才の時「我れ若し佛の道を得て衆生濟度の願滿たば救ひ給へ意願叶はぬなれば命失ふとも悔づ」とて絕壁より飛給ふたとき釋尊身を現して救ひ給ふたと云ふ出釋迦寺の來歷など尋ねて見ると御七歳云々の御事蹟が兎ても多いのである由來七の字は七七が四十九日七生が勘當の塵字七條がお袈裟七堂が山門、佛殿、僧堂、法堂、厨浴堂厠と寺の總稱更に七衆・七僧・七經、と數限りも無く佛緣に深い七の字又反對に七福七珍七草七賢七五三等々目出度い方にも多く使はれて居るとゝれば大師御七歳の時云々の言ひ傳へにも何か理由が有るのかも知れないと思つた（此件に就ては御高敎を仰ぎ度い）

七の字義人疑問の端を持ち

（未完）

柳川

觀心寺吟行

艸樂記

徂く春の一日を、柳友うちつれて、一日の清遊を樂しまうと云ふのが、今度の吟行の目的であつた。爛熳たる櫻の下で亂痴騒ぎはかへつて私達好む處ではない。櫻はすつかり葉に變つて、山野は清新、色に少し落つきみ見せ、而も全く暑からず、寒からずの快感氣候は、四月も下旬でなくてはならぬ。

處が、その二十九日の天長節は、前日の日曜と休日が二日續いたのと、翌日が晦日といふ樣な事で、差支が多かつたと見えて、參加者は少なかつた。

路郎師、萬よし、緣雨、亂耽、史呂、墨洲機見女、鶴峰、禿山、夕鐘、かほる、私の十二名、それでもこれだけ、難波驛に集つた

南海高野線長野驛に下車、徒步觀心寺に向ふ。驛から一粁の所に河合寺がある。案内記によると、眞言宗日本最古の伽藍として名高く、皇極天皇の二年蘇我入鹿が勅を奉じて造營した寺とあるが、今は頽廢して、僅かに經藏、假本堂、庫裡を遺すのみでひどく寂れてゐる。御本尊は大楠公が守本尊としてゐたと云はるゝ、毘沙門天を安置し、境内には服部南郷の撰にかゝる楠公遺愛の碑が建ちしてゐる。併しかういつた、遺跡、寶物などを仔細に見て行つたり、尙ほ遊んで研究でもしやうといふには、今日の樣な行樂本意の時には適しないから、例の酒落の連發と、高笑放談裡に先へ先へと道を急ぐ。これで愉快な時が過ごせればそれで澤山なのだ。

道々種々の草木が目につく　茜草、八重葎椿、木さゝげ、山吹、その他いろ〳〵、皆古川柳に緣故の深い草木で、種々古句を引いて說明した。茜染のこと、山吹の實のなるのとならぬのと、木さゝげは古梓弓を作つた木とされてゐる說など、折に觸れ、時は當つて話した、專門的に六ヶ數い事をいゝ出すのも亦今日の場合返つて興を殺ぐ。梓弓なき數に入る……か、八重山吹に實が生らぬ……なきぞ悲むか、誰かの駄洒落でなきづくめでは甚だ面白くない。

でも、朝來酒落のめしてゐる萬よし老も、路傍に一本の「しくなげ」の惜開せる花を指して見せたのには、ひどく感を催した樣子、柘榴の新芽が目の覺むる美しさ、よめな、はゝこ草、じやが薯の葉さへ知らぬ都會人には田舍道の珍らしさは盡きぬものがあつた。

二粁餘にして觀心につく。

松尾山と稱す。眞言宗の巨刹、文武天皇の大寶年間役小角の開創雲心寺と號したが、天長四年弘法大師之を再興し、高弟實慧（道興大師）を住ましめ、嵯峨天皇の叡慮によつて觀心寺と改め　勅額を賜ふなぞが案内記の概略、境内に寶庫、南蠻鐵燈籠、本堂、楠公建かけの塔、楠公首塚、中院、恩賜講堂、楠公銅像などが著名、少し奥まつて、檜尾御陵（後村上天皆陵）がある。先づ詣で、かつ見物する。

松中亭なる料亭に立寄り、こゝろばかり、滿開の八重櫻の庭を前に酒盃をあげて、晝食をしたゝめる。今朝路郎師のお骨折にて電車賃が五人分、剩餘が出來たので、豫定にない奢りに少しハメをはづし、三味線が持出されかほる、禿山、夕鐘、万よしの達者どころが舞ふやら、踊るやらで、いや實に罪のない事であつた。

題「まこと」

船の旅で無日のまこと嬉しがり　路郎
日本のまこと國旗にあるのなり　禿山
惡筆で姉の手紙の眞實さ　艸樂
純眞な女心へ向きなほり　夕鐘
誠ある手紙は誤字も喜ばれ　墨洲
うなづいてくれぬまことへ世わたり　機見女
だしぬけに噂だけかと迫られる　同

御禮

歸省中は皆様より一方ならぬ御歡待に預り何んの共御禮の申上様無之非常に感激致しました。

歸滿の際皆様に一々御挨拶を申上げる筈の處突然五月十日朝うすりい丸で歸滿の途に就く事となりました。お蔭で海陸共恙なく無事歸熱致しました。

早速皆様の御手許迄御禮狀差出のが本意でありますが乍勝手誌上から謹んで御挨拶申述ます。

康德二年五月二十日　敬具

滿洲國熱河省凌源小西街

岩崎柳路

岩崎松代

大阪川柳家各位

暑中見舞の廣告を募る

奮つて申込まれたし

雜誌の上で句や文章を見て一度手紙を出して交際をしたいと思つても、雅號は分つても肝腎の住所氏名が分らない爲めに、文通さへも出來ないといふ憾みがあるので、川柳家各位の住所氏名を一度に知る便法を兼ね、暑中見舞廣告を掲載することにしました。どうか奮つて御申込を願ひます。一人でも多く掲載することがその趣旨にもそふ譯ですから特に貴下の御賛同を切望いたします。

◆一口金五拾錢

幾口でも申込んで下さい。一口の原稿はなるべく簡單に願ひます。

▽申込期限　七月十日迄（八月號に掲載）

事務所　大阪市天王寺區上汐町一丁目五一　川柳雜誌社

振替大阪七五〇五〇番

廣告御申込は成るべく振替を御利用の上、前金に願ひます。（三錢以下の切手代用でも差支へありません）

福田山雨樓氏送別句會

五月十一日夜　於川柳雜誌社會館

名編輯長山雨樓氏の榮轉を心から祝福する川柳家が相集ひ、態々來阪された同氏を圍んで送別句會は平素とは異つた雰圍氣の中に熱心に作句された。路郎主幹の挨拶に次いで山雨樓氏の誠心より溢れ出る川柳愛による告別の辭があり、誠に有意義な一夜を過した。（汀柳、與三郎記）

出席者　路郎主幹、山雨樓、禿山、與三郎、墨洲、正光、角嵐、世間音、柳笑、破鼓、小柳子、つと夢、雅幽、東魚、豆秋、友帆、白峯、素月、亂耽、九天、默平、彩秋、青兒、夢裡、夕鐘、溪花坊、史風、八歩、美代路、春光、史呂、いわを、悟郎、白柳子、ひろし、綠雨、久郎、彩泡、みつる、艸樂、鶴峯、美奈子、靜江、翠夢、汀柳。

席題　前掛　互選

前掛でふき〳〵貧家敎へられ　素月
母と娘の前掛け姿へ日の永し　小柳子
前掛をすれば都會の世辭となり　青兒
前掛けへ心づくしを受けてゐる　柳笑
前掛けも汚さず文化臺所　史呂
前掛けをまるめて歸る夜の風呂　破鼓
前掛けをはづせばもてる若且那　彩秋
前掛けを後からさす砂遊び　與三郎
前掛けのはしを子供が握りしめ　いわを
前掛でぬぐう涙は里心　九天
菊正の前掛をして逆らず　友帆
前掛をはたいて炭屋釣錢がない　角嵐
手傳ひに來て前掛を思ひ出し　正光
言譯をする前掛けの皺を見る　默平
恩給の膝前掛けに馴れきつて　同
前掛けがヒヨツト淋しい夕まぐれ　豆秋
前掛の派手な名前でかせぐなり　同
電車まで送る前掛はづして來　雅幽
紫陽花へ動く前掛け美くしく　同

席題　金魚　ひろし選

壹錢の客へ金魚は疲れたり　彩秋
薄暗い座敷で泡をふく金魚　山雨樓
不自由な姿を金魚喜ばれ　春光
まる〳〵と金魚肥えてる藏の裏　破鼓
塗りたての白壁染めた金魚賣　夕鐘
淋しい日金魚の水をかへてやり　八歩
金魚賣り長屋で水をもらうなり　九天
午後の照り金魚あへなく腹を見せ　山雨樓
金魚欲しい子の手に母の眼が落る　破鼓
金魚屋へ奥の且那を呼んでくる　史呂
金魚仲よく晝を寢てゐる　みつる
幸福な二人金魚の夢を見る　同

席題　笛　亂　耽選

横笛の小指はれるが姿也　東魚
口笛へ君幻となつて來る　みつる
口笛を吹くと二階に灯が點り　默平
アパートの窓明笛の主が見え　友帆
山深し鶯笛の面白く　ひろし
高樓を月に浮かれた笛が洩れ　正光
角笛へ牧場の草伸びきつて　史呂
運轉手子供の笛に驚きぬ　小柳子
八木節は囃子をくざる笛を吹き　彩泡
笛吹いて五月の空をたゝへたり　八歩
草笛の戀も一筋道を行き　艸樂

席題　盲人　東魚選

盲人の杖とは知らず蟹あわて　素月
自轉車へ盲人いつかど口をきゝ　艸樂
盲人のさめて淋しい朝もあり　八歩
盲人を電車車掌は中へおし　つとむ
盲人のある日自分の笛に泣き　八歩
三十を盲の母に嫁き遲れ　ひろし
盲人が笑つて氣味が悪く成り　柳笑
見えてゐるやうに盲人話し出し　同
盲人の意地電柱へぶつゝかり　默平
末だ不安らしう盲は手を曳かれ　同
(人)盲人のともかく無事に電車で來　史呂
(地)洋服を着る盲人の黑眼鏡　正光
(天)盲人の日の出を拜む眞劍さ　九天

席題　剃刀　溪花坊選

剃刀へ明日の天氣を祈るなり　小柳子
揉上を二人剃合ふ晝の風呂　默平
剃刀の刄が咽喉へ來て眼をつむり　禿山
尼さんが剃刀あてる日和かな　夕鐘
朝風呂は貸剃刀を輕くあて　八歩
獨身の頃の剃刀錆びてゐる　墨州
剃刀を忘れて春の旅に立ち　素月
剃刀へ窓の綠が濃く映り　青兒
剃刀の切味もよし春綠　同
剃り味について廻つた夏の風　同
(人)剃刀の冷たさ我れにかへる　柳笑
(地)剃刀を研ぐ手へ春の闇動く　友帆
(天)父の顏母の剃刀光るなり　山雨樓

兼題　信　頼　山雨樓選

信頼の眼は主人より冴えて居て　ちかし
信頼をした座布團の厚みなり　いわを
信頼をする氣へ寺の鐘の音　破蕉
信頼された男は川へ石をなげ　小柳子
遺言に迄信頼をされてゐる　彩秋
信頼をされて目方がふへぬなり　友帆
信頼へすまない戀をおぼえたり　彩泡
信頼を裏切る宿に滝が鳴る　ひろし
信頼の後ろ姿へ散る花よ　白峯
信頼の頭の上のちぎれ雲　夕鐘
信頼が鍵を握つたまゝ暮し　綠雨
天地の中に信じるものは夫　溪花坊
信頼をしてた酔事の口が過ぎ　角嵐
それ以來信頼出來ぬ花名刺　同
五十年淋しく鍵を預りて　雅幽
信頼へたゞ體驗があるばかり　同
信頼をしてさかさまに判を捺し　豆秋
(人)信頼をして大濱で晝寢する　同
(地)信頼をされる丁稚の色白し　彩泡
(天)女にはもてない顏を頼られる　角嵐

妻

水谷鮎美選

着せかけてくれる姿も妻のもの　春帆
妻といふ強さ三等席でよし　德三
よせ鍋をつゝいて妻の酌をうけ　紅
商談へ人妻の口出過ぎたり　青兒
ふいと出る話は妻のことばかり　綠水生
妻よ子よ樂しい夢をみて眠れ　祥月
夫から許されてゐる妻の酒　長樂
ふと妻と蛇屋の蛇へ立ちとまり　崙喜固蘊
妻の手で出來たフランス人形なり　新水
久しぶり娘の手ほどきへ妻の琴　禿山
大臣の妻で何やら仰しやられ　つと夢
臺所の暗らさに妻の晉がする　三碧
子に妻で今日ほがらかなピクニック　歌都路
洗濯の張物板へ妻の唄　さわだ
はした錢とにかく妻はためて　寒草
プロフイル妻には妻の意地があり　輝親
叮嚀に妻留守使ふ電話口　葉光
妻の智惠かりる日多し恙なし　同
こと更に妻喜んでくれるなり　曉童
レコードは妻の好きなの順が來す　同
佗びしさになれきつて妻獨りゐる　蘇堂
郎君を看護り疲れて雨を聽く　梢雨
亡き妻を呼ぶ兒を抱き燈明がゆれる　天秋
妻としてそして國防婦人なり　正柳
愛はほの白ろきものにして妻逝けり　照坊主
妻の名を活字に添へて御榮轉　文庫
更生を誓ひて妻と別れし夕　いの助
妻若し同窓生が訪れる　紫陽
鍵持たす妻といふものあつてよし　芳一

三　光

いつとなく汚れて妻の口答へ　苦捻
南米の天地に妻とふたりきり　双亭
内緣の妻に子供が出來ぬなり　笙人

軸

このごろ
姙娠の妻をうれしくみてるなり　鮎美

川柳家戸籍調（續）

（係）　綠雨

（1）姓名（2）雅號及別號（3）生年月日（4）出生地（5）現住所（6）職業又は勤務先（7）好きな句（8）自信の句（9）川柳以外の趣味（10）配偶者子供の有無（11）嫌ひなもの（12）川柳に手を染めた年月

（438）　武田紫陽

（1）武田明正（2）紫陽、清水流汀、（3）大正元年十月八日（4）愛媛縣越智郡日高村高橋（5）今治市本町二丁目清水千輔方（6）丸高ちゝぶ店店員（7）あまりに多く書ききれません、元日だせめて眼鏡を拭きましよう（路郎師）、のど佛意見の中によく動き（舟人）其の外古句（8）はずかしいながら一句もあげ得られません（9）これと示す程のものありません（10）なし（11）實行しない人（12）昭和七年七月中句

（439）　角谷池游

（1）角谷國藏（2）池游（3）明治三十五年五月二十七日（4）愛知縣碧海郡知立町（5）名古屋市南區野立町字京田（6）名古屋遞信局保險課（7）俺に似よ俺に似るなと子を思ひ（路郎）聞合せおや〳〵緣がつゞいて居（當百）（8）改札に聞けば鋏で教へられ、二三冊下の雜誌を拔いて買ひ（9）謠曲（10）有、男一、女一（11）お世辭（12）大正末期

税金　須崎豆秋選

税務署へ嘘ばかりみ申し上げ　朝雨
汗拭いて父納税へ素直なり　寛水
税金を持たしてやつて畫の風呂　琴泉
税金の用事を羽織掛けで出る　曉童
税金をやつと納めた夕の膳　三碧
税金へ收入役の無表情　春帆
税金を銅貨で拂ふ駄菓子店　美代路
不足税取られて讀めば切れ話　葉光
税金に未だ緣遠く子は二人　つと夢
安いものさと自轉車税納め　佐保蘭
花客へ遊興税も言ひふくめ　笙人
六感を信ずる如し税關吏　梢雨
これしきの税金督促料がつき　非常兒
共稼ぎ子が税金を納めに來　輝親
哲學の大家税金忘れて居　嵜喜固蘊
滯納に利子を勘定しての事　墨洲
無職でも多額納税して居ます　柳夢
税金をワイフ裕々出して來る　忠司
墓口の底に税金だけ殘り　新水
税金の未納も知らず十八九　章泉
税金の話になつた朝の風呂　德三
女中税町會やつさもつさ採め　桂林
税金を出して氣長く話しこみ　照坊主
税金の順にならんだお歴々　祥月
サラリーのはるかに遠い所得税　禿山
怠納の話愉快な男來る　世香
税金の財布を首に二里三里　不二號
喧嘩するやうに税金拂つて來　都會人
税金の係は四角い顏の人　美津女
世辭言ふて村の税金取りにくる　天秋
白い菊植えて納税たまつてる　同
看板の大きさ税金見逃さず　いわを
税金を勿體ないと思ふて見　同
ビール一本の税金かんがへる　寒草
税金が拂へぬ村がある日本　同
妾宅の分も交つた戸數割　青兒
税金へ歪んだ氣にもなつて見る　同
めい〳〵に税金を出すいい暮し　菊路
税金へ妻新らしい紙幣を足し　同
バツト級消費税だけ知つて居る　蘇堂
女給税又問題となつてくる　同
本名で役者税金納めに來　紅
税金のことで半日待たされる　同

佳吟

税金へ大きくなつた貰ひ犬　禿山
表門閉ざして多額納税者　いの助
新築税雀の知らぬ事であり　葉光
税金を納めお辭儀をして戻り　紅
妾宅の驚くことに所得税　新水
納税の期限を案山子知らぬなり　嵜喜固蘊
(人)收入役一錢足らぬ顏を見る　芳泉
(地)税金は又も無言の父にする　木履
(天)納税書眼鏡を二つかけて見る　紫陽
(軸)税金の督促に來て牛をほめ　豆秋

(440)　深山閑古鳥

(1)橋爪辰郎(2)深山閑古鳥(3)三十七八年戰役當時(4)加賀國寺井ノ里(5)石川縣能美郡寺井野町(6)ヂヤーナリスト(7)働いて食へと都會の音がする(紋太)是切りの紙幣も崩れた大晦日(8)右左秋の入陽を野に感じ、いろと慾浮世の影に咲くつぼみ(9)短歌、謠曲、詩吟、俳句、(10)配偶者(一人)長男一人(11)ネズミノクソ(12)極めて淺し五年前

(441)　小川欣子

(1)小川欣子(2)同(3)明治四十二年三月五日(4)澁谷區千駄ヶ谷(5)東京市本郷坂下一二六(6)今は無し(7)青空へすつきり立つて無神論(信子先生)(8)女から涙をとつた日の强み、飯にはなるが人間じやない(9)讀書(10)有女兒一人(11)(12)昭和五年八月

(442)　淺野牧人

(1)淺野精一(2)牧人。雅仙。惠日庵(3)明治三十一年九月廿五日(三十八歳)(4)青森縣弘前市(5)大阪市東淀川區十三東ノ町四丁目二十二番地(6)十三ドリル工具製作所(7)西村明珠氏の作品が理窟抜きでいつち好き他に艸樂。路郎。紋太氏の作品等(8)遠慮しておきます研學末しですから(9)すべて神秘的なもの特に心靈問題。古神道の研究。他に謠曲讀書映畵漫歩等々(10)しと、一女玉子(八歳)兒は可愛いですナア(11)理智に過ぐる人。迷信。佛教。現代科學の過信者。自己の短所。政治屋(12)十五六歳の時分。

消息

▽川村觀月君（神戸）御令閨は四月十四日午後十一時四十五分目出度女兒安産され純子と名づけられた。

▽西村山月君（本社同人）は四月上旬より病臥さる切に全快を祈る。

▽福田鶴峯君（本社同人）の令閨は肋膜炎にて五月九日入院。

▽石曾根民郎君（本社同人）は五月十日華燭の典を擧げらる。

▽朝田新水君（本社同人）は五月十一日東京へ、歸路は北陸巡遊。

▽竹内機見女さんは五月十三日絡北寂光院へ參拜。

▽井田ひろ子さん（京都）は五月十八日華燭の典を擧げられると。

▽富士野鞍馬氏（東京）は北滿道への途次、五月二十一日青森連絡船待合室で小林不痕人氏と會遇。

▽氏萬よし君（本社同人）は市會議員として五月二十二日夜行で東上。

▽川合舟々君（大阪）は五月二十二日、琴平宮島、別府を經て阿蘇山へ。

▽島田翠峯君（大和）は五月二十四日伊勢參宮へ。

▽加藤文醉君（祖父江）は祖父江音頭及新小唄放送出演者代表者として五月二十四日JOCKへ。

▽西村明琇、山田貧兒の兩君（神戸）は五月二十五日、宇治、石山、大津、京都へ。

▽石曾根民郎君（本社同人）の甥にあたる童謠の歌手山崎一郎さんは、ポリドールレコードに童謠「ハルピンの馬車屋さん」を吹込まれた。

寄書拜受

岬川柳社、梅鉢同人小集　川柳高松吟社

訂正

前月號本社句會報の左の句主靜江とあるは美奈子の誤り

フェルトが利休に變る俄雨

改號

▽前田双平君は（朱朗）

社告

▽本社鏡川第二支部高松吟社の幹事は加藤健芳君が新任されました。

▽本社廣告部へ藤村義呂君が入社されました。

川柳指導講座

課題「わが親」一人一句

「わが親」といふ四文字の課題と思はず、必ず自分の親御さんへの色々の感想、思ひ出、愛慕、など、さうしたものを十七字見當のものにして下さい。

締切　六月二十日
發表　八月號
投句　本社事務所宛
選者　川上三太郎氏

各地柳壇

いのちあるかを創れ

路耶・汀柳・艸樂・整理

阪大川柳會やよひ例會

丸島利生報

兼題　椅子　路耶選

考へて置かうと椅子の向を替へ　一杯
高い椅子でせめて靴でも磨かそう　芳一
校長の椅子が賣買される世か　青一路
いざ物語らんと椅子引きよせる　路生
こんな椅子ぐらいとは思へども　同
夕暮へ椅子もち出して長い氣分　氷炭
休憩室こゝにも椅子があいてなし　同
その椅子を讓り合ふてる滑模樣　柳秀
籐椅子の灰皿へ吹く春の風　同
その椅子がものを云ふなり盲判　利生
落成日貴賓室のへ掛けてみる　洗塵
デッキチェアー椰子の樹高く日章旗　同
日本室へ今のはやりは椅子を置き　渉女
開運の椅子がまつてるやうに云ふ　湧三
（布施醫長を墓ぶ）

その椅子について驕らぬ醫長なり　同
人はあつても座りてのない椅子　方正
椅子はあいたが市長の椅子だとさ　栞
幹事さん自分の椅子のないを知り　同
春うらゝベンチの上は我が世なり　眞三
籐椅子の嬉び母子差し向ひ　同
（人）父兄會我が子の椅子を見て歸り　柳秀
（地）金融をたのむ喫茶の椅子を　同
（天）ソファーに刀自と云ふ名のかくし　栞

兼題　裏門　路耶選

裏門のあるをあいつは知つてゐる　路生
裏門を出れば夜霧が流れてゐ　同
裏門へ廻す保釋のパッカード　青一路
女もう裏門で待つ度胸なり　湧三
裏門にファンは素顏を待ちにくる　同
裏門の近くへ鳥居張つて置き　正甫
櫻賞め〳〵閣下裏から出で　洗塵
裏門へそつとはいりし時の人　方正
舞臺面裏門と云ふに派手すぎぬ　眞三
（人）裏門のある風景に屋臺店　湧三
（地）裏門を出ておゞじを讀み直し　たけを
（天）裏門を新聞記者は見逃さず　同

雜吟　路耶選

舊友と逢ふ道頓堀は時雨てる　たけを
ボン引がまだ寄つてくる若さなり　利生
城崎の雪を相合傘で出る　栞
何事もあなたまかせの春爛漫　眞三
金を蹇すみ金にあこがれ廿才過ぎ　同
（秀）春は憂鬱だと宣ふ果報者　干秋

席題　出好き　路耶選

よう内にゐたなと禊あけられる　路生
長男はブレイガイドの顧客なり　正甫
讐でも探してゐる樣に出て歩き　洗塵
その出好き亭主ほと〳〵弱り果て　青一路
國防もよいが子供をどうする氣　柳秀
またお出掛けですと女房傘を出し　干秋

投稿清規

一、用紙はなるべく原稿用紙のこと
二、文字正確明瞭に記載すること
三、開催月日及場所記入のこと
四、締切は毎月末日とす
五、投稿先は本社事務所

蔵員面目出好きのママをもて餘し　方　正
衣裝と美貌が出好きにしてしまひ　同
おむつまで提げてと姑眉をよせ　渠
出好だけにこんなことまで知つてゐる　同
戎橋出好きの人を待ち受ける　たけを
正札を出好きの人にあてられる　同
ふところはどうであらうと出好なり　一杯
他所の灯を見れば寢られぬ親父も　同
母親の出好がさせた成績だ　同
出好きと知つて寢込を押へられ　同
何となく家に居るのが嫌ひなり　同
足止めをくつて日曜もてあまし　利生
病氣にはかてぬと出好き家にゐる　同
何時に行けば一體逢えまんねん　同
行く程の事でないのに服さかへ　同
出る口實のない日曜は淋しいな　同
(人)今日も亦出好の人の髮を結ひ　たけを
(地)なんのかのと云つて出たる着物持ち　芳一
(天)お子さんの數を出好きにきいて　たけを
(軸)今日も明日も留守々々々に女中縫ひ　路郎
(同)今日も亦先を越され留守をする　同
(同)金借りに來たものの運れて松竹座　同

川柳雜誌社　**高知句會**（高知）

三月廿一日カフエープラジル樓上

國澤　春水報

席題　春の灯　翠　川　選

春の雨誘惑をする灯がともり　珍景
吟聲で春の灯を舞ふ久振　濁水
春の灯に女言へない事があり　青雨
春の灯に妓の嘘を聞いてやり　春水
春の灯へ母のない娘の物想ひ　春水
灯に近く入學をした子を諭す　青雨
(佳)春の灯を漁る者さを自嘲する　珍景
(同)夜櫻の灯へ新妻と影を踏み　濁水

席題　卒業　珍景選

卒業の論文へ笑む戀があり　六紘
卒業の安堵は箸に音がある　青雨
卒業が間近く父にあらたまる　濁水
苦勞した母へ嬉しい卒業日　翠月
卒業を寄つてたかつて大人にし　青雨
(秀)卒業日テニスコートも空いてゐる　春水
(軸)卒業の義務を果した心持　珍景

席題　ウインド　青雨選

ウインドの前で牧師の立止り　柳翠
ウインドの春を娘の見つけて來　同
ウインドの右も左も妻のもの　珍景
(人)ウインドも見ずに確な客が來る　六紘
(地)ウインドの中の姿はスキーヤー　春水
(天)ウインドは賣れないで切れてゐる　濁水

席題　蛙　六紘選

產み親も知らず蛙の子は青つ　翠川
浮上る蛙の顏に藻がかゝり　青雨
盆栽の棚へ蛙が來る小雨　柳翠
蛙鳴く窓に旅愁の手を重ね　翠川
(佳)方向を忘れた蛙街にゐる　杜葉子
(同)愛の巢へ蛙ひよこ〳〵まより出で　春水
(人)人の世にかゝはりは蛙鳴く　珍景
(地)五月雨へ蛙自分の世と思ひ　春水
(天)雨乞ひは蛙の聲を待ちあぐみ　泉流
(軸)夜の道を蛙の聲に迷はされ　六紘

兼題　印（判）　濁水選

圓滿な家庭こはした保證印　翠月
集金の印をやんわり押して去り　六紘
判を捺す主任片意地らしく見え　春水
始末書へ秋から出す一文判　翠川
拇印捺す瞳に決意見つけたり　柳翠
判を押す手許をじつと見てゐたり　珍景
(佳)陳情書三文判がかすれてゐ　青雨
(同)性急に月給貰ふ印を出し　六紘
(同)先生の判が嬉しい通信簿　春水
(人)眼の底を射る證文ににじむ印　翠川
(地)登記所へ出來たばかりの判を持ち　青雨
(天)引受の判へ兄弟揉めてゐる　泉流
(軸)賞めてゐる軸印章の字に迷ひ　濁水

明坊君を送るの會

呼柳社同人

三月二十六日　大藏局倶樂部

呼柳社のために色々御盡力下すつた明坊君を今度の御榮轉にて姫路へ送る。惜別の情轉禁じ得なかつたが、今後共益々御聲援あらんことを希望しつゝ、和やかな零圍氣の中に終始した。

兼題　行く手　明坊選

麗人の行手へ牛が尻を向け　杏林
ハイキングの行く手に蛇が出た騒ぎ　天八
行く手はろばる雲一つ輕られる　某人
(人)受驗日　朝が晴れたり子を送る　九天
(地)青雲を乘せて列車は春の息　久米雄
(天)失業の鋪道へビルの灯がともり　水客

轉勤

(軸)霧深き道のまだ〳〵遠いこと　明坊

兼題　激勵　九天選

激勵をうるさく試驗の朝を出る　天秋
激勵へ顔面筋が躍るなり　明坊
期すや大勵ます聲に酒が散り　某人
激勵に固く誓つた金ボタン　木履
いたいけな入試へ守り札持たせ　天八
激勵の母に貰ふた守札　秀太
(人)激勵のコツプが割れたのもかなし　某人
(地)激勵の友は無口な歩をあはせ　水客
(天)激勵の父へ軍刀抜いて見せ　久米雄
(軸)激勵に答へる眉の眞一文字　九天

席題　インキ壺　杏林選

インキ壺榮轉の荷へあばれてる　小瀨木
インキ壺ホコリを吸ふて更けてゆき　明坊
インキ壺思案に耽り庭をつき　木履
缺勤の机へインキ壺の影　天八
快報へほこり拂ふインキ壺　秀太
(佳)インキ壺ペンが底までとどく音　水客
(人)インキ壺傾けて書く無心狀　秀太
(地)インキ壺まで春の陽がのびて　水客
(天)書難い手紙へインキ壺の角　喜山
(軸)インキ壺埃のまんま缺勤んでる　杏林

席題　呼賣　水客選

呼賣へバスの泥水まともに來　小瀨木
呼賣へ新婚夫婦派出に立ち　一蜂
呼賣の釣錢がいる發車ベル　喜山
打水に豆腐屋ぐるつと廻るなり　某人
(人)呼賣へ散歩姿が寄つてゆき　天秋
(地)きつちりと來て物屋蓋をあけ　久米雄
(天)呼び賣りと呼び止むいゝ木陰　某人
(軸)呼賣の聲が故郷の驛になり　水客

席題　大空　某人選

限りなき大空とゐる日曜日　天秋
除隊日の大空の色故郷の色　一蜂

大朝訪支飛行

旭影を眞近に高氣壓を拔け　久米雄
合格の知らせ大空すみきつて　一蜂
大空をうかべて春の水が暮れ　水客
解禁の銃大空にひゞくなり　木履
(人)大空へ燒場の煙行く氣なり　天八
(地)大空の心おうきは影法師　水客

新婚の友

(天)大空の下で囀る樣に住み　明坊
(軸)夢若く大空青くわれ立てり　某人

席題　後姿　喜山選

まぼろしとなつた姿の友偲ぶ　久米雄
落魄のうしろ姿が月を受け　某人
新妻の後姿へ長屋の眼　天八
愛人に似てゐる姿路次に入り　天風
斷つた乞食の背がふと淋し　久米雄
(五)チンドン屋うしろ姿へ櫻散る　水客
(同)後姿が惜しまれて白痴なり　天秋
(同)出稼ぎに行く子が橋でふりかへる　九天
(同)義捐箱後姿を意識する　某人
(人)負け角力背へ夕日を浴びて去に　明坊
(地)鉦かついで行く姉亡母に似てうれし　九天
(天)花に醉ふ後姿に不安なし　天秋
(軸)新調は一回後ろむかされる　喜山

轉勤

轉勤のうはさ旅行をやめにする　水客
御都合のとほり轉勤して平和　某人
轉勤の噂へ女事務憂へ　天八
榮轉へ妻はしよんぼり夜を待ち　久米雄
轉勤の辭令へ電燈暗いなり　天八
轉勤の挨拶どもる口となり　明坊
(秀)敬髮屋御榮轉でと鋏取り　一蜂
(同)轉勤の椅子が空てるまゝの春　水客
(人)榮轉へ妻紋付で若う見え　天風
(地)入日大きく轉勤へ歸宅する　秀太
(天)轉勤のこゝに同んなじ趣味の人　九天

川柳雜誌社
梅田支部
三月二十七日　於觀月居

春季句會（大阪）

川村　觀月報
清　記　互選

水族館今日のおかずが泳いでゐ　榮世
東縛を感じて魚の泳ぎたり　觀月
鼻のさき鯛向きを變へむきを變へ　鮎美
水族館まつこうからの魚の顔　卜居

匿　茶漬　觀月選

氣安さはあつさり茶漬でかたづける　靜波
ぶゝ漬の靜かな部屋の紅椿　鮎美
(佳)青疊匂ふ茶漬の妻揚子　卜居
(同)金儲け茶漬の朝が忙しい　鮎美
(軸)まとまらぬ話茶漬を食べて出る　觀月

匿　摘草　靜波選

母ちやんを待たして摘草まだつゞき　夕鐘
摘草へお隣さんとうまが合ひ　觀月
摘草に野球のボール見つけたり　鮎美
(佳)摘草へふたりの肩が寄りそつて　夕鐘
(同)摘草へ低空飛行してゐます　觀月
(同)摘草の春の日傘がよくまわり　鮎美
(軸)思出に觸れて摘草微笑めり　靜波

題　二人連れ　卜居選

二人連れ人の氣配に手を放し　靜波
二人連れ夜ごほし呑んだはしご酒　觀月
(佳)二人連れ夫婦にされて困る　夕鐘
(同)二人連れ土筆が伸びてゐる　靜波
(同)二人連れ酒あり春の灯に唄ひ　鮎美

題　待ちぼけ　夕鐘選

待ちぼけになり三味線の糸を〳〵め　觀月
待ちぼけのセコンドの音癖になり　靜波
髮結ふてそゝくさと來て待ちぼけ　鮎美
(人)待ちぼけへだら〳〵坂の畫の月　卜居
(地)待ちぼけへ蝙蝠が來る悲しさ　鮎美
(天)待ちぼけ毛東風がもてあそび　卜居

題　母の聲　鮎美選

(佳)應援のなかに嬉しい母の聲　靜波
(同)母の聲落ちゆく兄がまひ戻り　夕鐘
(同)仲人へきつちり申す母の聲　同
(人)北風のなかを戻れば母の聲　觀月
(地)斷りを上手に言ふた母の聲　夕鐘
(天)パトロンへ母の聲とは思はず　同
(軸)あゝ夢かおぼろに消ゆる母の聲　鮎美

一羊女祝婚句會

三月二十七日　於一羊女新居　西いわを報

席題　團欒　互選

團欒に給仕の足が横に出て　一羊
團欒にお冷やが欲しい女の子　いわを
團欒へ火鉢の灰も柔かし　青兒

席題　足袋　互選

行樂の足袋草の香がしみてゐる　晤栽
泣きやまぬ子へ調子とる足袋の裏　夢裡
木枯に白足袋一つ屋根に落ち　青兒
長男の足袋と違へて出して來る　いわを
令夫人足袋の格好まで云ふて　一羊

川柳雜誌社今治支部例會（今治）

曾我部宵明報

三月廿八日　貯蓄銀行支店樓上

兼題　刑事　文庫選

子を連れた刑事と出逢ふ花の山　一風
夜の底を刑事としての千鳥足　宵明
刑事の子一人ぽつちにされてゐる　曉童
面白く刑事裸にさしてゐる　同
朝歸りみたいに刑事戻つて來　同
(軸)子を抱けば刑事らしくもなく　文庫

兼題　放送　曉童選

放送は今一點をいれたとこ　一風
放送へこんな人氣が待つてゐた　心府
放送はしきりなほしを繰返し　宵明
(軸)村長も出て放送の郷土色　曉童

兼題　緣日　心府選

緣日に藝者の祈願長いこと　宵明
緣日を青訓服は素通りし　文庫
緣日の仁王不足な顏で立ち　宵明
緣日へお父さんだけおいて出る　曉童
(佳)緣日へ三遍も來る男の子　同
(同)お緣日風船玉のさけた音　宵明
(同)緣日の灯であらためた皮財布　一風

席題　出勤簿　渡邊曉童選

出勤簿個性そのまゝ押し終り　宵明
月末が近づいてゆく出勤簿　心府
出勤簿水晶の印もの〳〵し　文庫
米代になる出勤簿しかと押し　宵明
(軸)出勤簿新婚と云ふ朝を押し　曉童

席題　呼鈴　曾我部宵明選

呼鈴を新聞記者は强う押し　文庫
皿洗ふ音呼鈴にふつとやみ　心府
呼鈴へ社長の用はしれた事　曉童
(軸)呼鈴ムックリ起きブルドック　宵明

阪大川柳會卯月例會

丸島利生報

兼題　晝の酒　路耶選

晝の酒女にあまり明るすぎ　正甫
晝の酒白日を行くを恥ぢとせず　路生
いゝあんばいに降つて來た晝を飲む　同
公休の晝は一本だけがつき　たけを
掌で唇ふいて晝の酒　栞
晝の酒の味も知つてる女なり　利生
いゝ花だ見頃だこゝで飲むといふ　湧三
轉た寢の醉醒へ春の鐘をきゝ　千秋
夕閣を待つ流連に酒甘し　方正
若草の褥に酒はこぼれ落ち　貞三
日曜の晝は飲むかと度々訊かれ　柳秀
葬式へ欺こそ出さぬ晝の酒　正甫
事の首尾願うて晝を酒で出る　芳一
晝の酒呑むお座敷は靜かなり　永炭
想ふことみんな嬉しい晝の酒　一杯
仲裁が相手と變る花見酒　同
(人)こんな頭でと女將晝の酒を　路生
(地)春雨が出先を酒にしてしまひ　千秋
(天)まあこの位でと晝の猪口を　路生

兼題　春の雲　路耶選

春の雲こゝは療養所のベット　たけを　利生
食ふ爲に畑を打つなり春の雲　利生
動きなき春の雲なる我戀や　真三
ハイキング歩み歩んで春の雲　同
春の雲悠然として一機行く　たけを
雲があつて油繪やつと春に見え　路生
制服が背廣になつて春の雲　芳一
春の雲嬉しかつたは前のこと　利生
春の雲こゝは建武にゆかりの地　氷炭
（人）大望は春の雲だけ知つてくれ　真三
（地）白雲悠々一本の土筆伸び　楽
（天）兵子帶のゆるみへ春の雲が　同

雑吟

信心でくれば生駒は花盛り　たけを
口笛はうつかり父の氣を損れ　柳秀
腰拂ダンネンと新婚たのしさう　北星
眼鏡ふけばため息に似た息が出る　楽
（秀）散財へフットしゃまのおちうしく　洗塵
席題　送別　路
送別の宴へ女おきやんなり　耶選
見送りに來て麗人のあるを知り　方正
世の中を知つて歸れと惜別し　青一路
花ぐもり君は別れて行くと云ふ　芳一
思ひ出の品々積んで送られる　橙舎
見送りの一人仁丹買ふてくれ　一杯
送別にかはすビールの泡淡し　楽
榮轉を祝ひ名殘りを惜む酒　柳秀
送迎會肇長と署長立ち上り　千秋
饌に女がくれた煙草入　利生
お別れだ飲みましようと妓酔ひ　同
送られる人に妓は惚れちまひ　同

（五學閥もあらうが君よやつて）　芳一
（同）シッカリやつてくれ親友眼を拭ひ　千秋
（同）送らして貰ひすわと酌ぎに來る　青一路
（同）送別會恩師の横に坐らされ　たけを
（同）なんとなく螢の光涙ぐみ　洗塵
（人）送別のあとはおぼろの夜となり　氷炭
（地）送らるゝ人へ女將はつきつきり　利生
（天）出世もよいが別れるのは淋しい　柳秀
（軸）送別を餘外に藝妓と談してる　路耶
（同）僕等ばかりの送別會と又誘ひ　同
（同）左遷されて送別會も型ばかり　同
（同）送別の辭も淀みなき年と成り　同

川柳雜誌社竹原支部 例會（廣島）

四月二日　於春帆居　承　春報

兼題　波　蛙　庵選

みつむれば渦卷く波の物凄く　承春
なぎさ打つ波を無心に見て居たり　春帆
電波今SOSの空暗し　芳泉
波の音我傷心をさするなり　春帆
（人）たゝ暗き波のリズムを聞き居た　芳泉
（地）砂洗ふ波さへ春のやわらかさ　春帆
（天）こゝからが大平洋と云ふうね　芳泉

兼題　灰　承　春選

聲立てゝ女等にげる灰かぐら　春帆
灰の文字搔消されては又かゝれ　蛙庵
瀬葬場の灰は肥にされちまひ　春帆
珍客へ火鉢の灰を替へに立ち　芳泉
（佳）つかれ果て様にパットの灰が落ち　春帆
（同）溜息は火箸が灰へ書かすなり　蛙庵
（軸）夜廻りは灰の溫みをきまぜる　承春

席題　中年の戀　呂烈選

年甲斐もなく桃色の夢に酔ひ　芳泉
一思案中年の戀無理と無理　左傳
中年の戀もかくも酒となり　蛙庵
中年の戀原化粧してもみる　承春
（佳）みえもなく年增の戀の狂わし　承春
（同）すがるだけが四八の戀でした　替帆
（軸）憎むべき戀の打算がはや僕に　呂烈

席題　綻び　春　帆選

綻びに氣付いて娘頰を染め　芳泉
綻びにかく溫き手を感じ　呂烈
（佳）綻びを縫ふ男手のかなしかり　承春
（同）術もなく綻び日々になりゆく　呂烈
（軸）綻びへやさしく恪氣して見る　春帆

席題　雨　芳泉選

欄干に思ひはゝるか春の雨　春帆
炎あとのかゆさがつのる雨となり　蛙庵
（佳）植木店悠然となる俄雨　左傳
（同）やるせなき想ひの窓へ春の雨　蛙庵
（軸）雨もよし新妻驛で待つてくれ　芳泉

川柳雜誌社松江支部 例會（松江）

四月五日夜　於ミドリ喫茶園

集る柳人は廿三名にて盛會裡に十時半散會す。（祥月報）

兼題　爪　彈　夢　謎選

口説かれてから爪彈の音になり　糸葉
爪彈きのいつか勸進帳になり　鼻人
爪彈きは待つてる型で彈いて居る　菩二
落籍されてからは爪彈きばかり　莞路
爪彈きの窓を開けば朧月　菩二

爪彈きの銚子すつかり冷え切つて　砂詩朗
爪彈きのごぎれ〳〵に待つ　想ひ　天痴人
爪彈の切れ目夜警を意識する　大鳥
爪彈きを何と聞いたか引き返し　靜二
爪彈きの隣座敷はすれてゐる　砂詩朗
爪彈の洩れる表札見主され　大鳥
兼題　ハイキング　柳　人選
ハイキング何時か軍歌の歩調なり　糸葉
ハイキング水車の音がめづらしい　莞路
ハイキング碧空高く石が飛び　笑鬼
罐詰の味がうれしいハイキング　天痴人
母さんの手をひぞゐるハイキング　幸明
ハイキング伍落者同志飲んでゐる　夢謎
素白き都會に住んでハイキング　巻二
(佳)一ト組は女ばかりのハイキング　砂詩朗
(同)ハイキング野良の多忙を見て戻り　天痴人
(同)ハイキング風飄々と帶の端　都之介
(同)青空に續く道行くハイキング　巻二
席題　白酒　大　鳥選
白酒に大工不足な顔をする　幸明
白酒に酔ふた女の座が崩れ　柳人
白酒に女同志のゆずり合ひ　巻二
女座へ白酒を抜く雛祭り　柳人
白酒に妹の眼がうるんで來　天痴人
席題　雲雀　山川兒選
雲雀の聲に童心を抜き出され　砂詩朗
揚雲雀教へる指に見當らず　大鳥
病む我れの障子あけたり揚雲雀　耕二
雲雀もう巣をこしらへた春の色　天痴人
雲雀鳴く易が小春の抒情詩か　勁一郎
畑打ちの腰をのしたり揚雲雀　耕二
志あり雲雀鳴く里を捨て　巻二
放尿の畑に立つた上雲雀　柳人
雲雀の巣麥の草取る娘がみつけ　天痴人
(佳)太陽に雲雀は請願してるんだ　勁一郎
(同)雲雀もう百米は上る積り　錦葉
席題　縹　緻　巻二選
ご縹緻の悪い女がよく喋り　夢謎
自惚れて鏡に戀を夢見てる　莞路
月給の高で縹緻が貰はれる　秀清子
長屋では朽ちぬ縹緻を賞められる　柳人
女教員縹緻は別なものとして　大鳥
縹緻よく生れただけの職に生き　耕二
未亡人縹緻と別に派手好み　大鳥
席題　活　字　耕二選
(佳)活字なつと我が名を見付け出し　糸葉
(同)活字組む自信な皿がかよひ　祥月
(同)灰色の指が活字をつまみ出す　勁一郎
(同)讀める字も活字に任せタイピスト　山川兒
(同)活字から春が來てゐる花爛漫　柳人
(同)當選は初號活字の巾を取り　大鳥
(人)活字から春をひろつて病みつゐる　天痴人
席題　天　職　砂詩朗選
天職を全うしてる配達夫　大鳥
天職にしてはふざけたチンドン屋　天痴人
天職は忘れておらぬ發明狂　大鳥
天職にされて生きてる小作農　耕々
天職と信じきつてるヘルメット　鳥人
席題　横　械　天痴人選
ノーチップ機械の樣に送られる　錦葉
機械が止つて何かあるらしい音　夢迷
機械の音に遠ざかつて解雇狀　夢迷
ベットの唸り結核頭腦の唸りです　笑鬼
便利にもなつたが機械首をきる　秀清子
機械を止めて人間の手を抜く　夢迷
發電所機械の中に小さく住み　巻二
席題　洋　館　互　選
搾取した金で洋館建てゝゐる　秀清子
洋館の庭は日本の花が咲き　巻二
洋館へつく三越の鳩時計　都之介
洋館の親しみのない伯父が來る　大鳥
洋館は別な路から勝手口　耕二
十八九洋館に住む夢が有り　糸葉
洋館が見上げる親娘疲れてる　砂詩朗
洋館の光りが父の氣に入らず　柳人
洋館の主人近所の人知らず　一潮
洋館に愛嬌のよいお嬢さん　祥月
洋館のはなれにするでる人氣者　淞南

川柳雜誌社
螢ヶ池支部　例　會（螢ヶ池）
四月七日　三號館娯樂室　緩　紅報
兼題　土　筆　柳　次　選
ひとり子の送りに土筆伸び　豆樂
草を焼く匂ひ土筆が陽炎ふて　青鬼
彼の手のぬくさを土筆つたへ來ぬ　機見女
叱られて土堤に土筆が闌けてゐる　緩江
啞の子へ土筆の道がかげろへり　靜太
あせてゆく懸へ土筆の伸び切つて　同
(佳)つく〳〵し闌けて工業地區のはる　緩紅
(同)東京は恐いところよ土筆つむ　同
兼題　踊　り　源　太　選
こつぼりの鈴に踊の夜が更ける　まさる
耳で聞く春の踊りの物足らず　功

滿開の櫻みんなで踊りませう　美智子
踊り子の戀ともならず散るさくら　緩紅
ステップはかろしいっせいに瞳と見えず　機見女
春の灯に踊る妓の片えくぼ　鮎美
踊り娘の吐息にくもるたて鏡　六朗
母前へ踊り終つた妓がにほふ　靜太
(佳)しっとりと踊りのはてた京の街　緩紅
(佳)親ひとり子ひとり踊る旅の空　豆樂
(同)すきな娘のライトをあび立つてゐる　靜太
(同)先輩の踊りに春が來てるなり　鮎美
(同)踊る手へ二ひら三ひら散りすなり　晴天
(軸)踊りから拔けて小川にすゝぐ足　夫選

兼題〃電　車〃　晴

春の山ちいさく電車はしるなり　緣之介
白粉のはげた女と終電車　六朗
金箔につかれ電車の錦に掛け　柳子
鬣の痛み滿員電車ゆれて行き　同
少年のゆめを電車がはしるなり　緩紅
水枕とほへでんしやのひゞくなり　靜太
待ちほうけ電車で歸る君となり　鮎美
(佳)ローマンスカーのつれびとなり二あ人　靜太
(同)眞夜中のビルを背にして待つ電車　源太
(同)貸切りの電車(榮種紫雲華咲く　青鬼
(同)團體を二つに切つた花電車　柳次
(同)生醉ひの君と僕との電車だれ　鮎美
(人)電車から降りれば花火また上り　靜太
(地)故郷の電車のり場で月が冴え　とし夫
(天)忙しい人をさらつて行く電車　功
(軸)あまき夜風と少女を乘せて電車　太選

席題〃不眞少女〃　靜

不眞少女へら臺を跨いで來　柳次
年きけば不眞少女わらふなり　公平
惠まれて不眞少女になつてゐた　緩紅
不眞少女ゲレタガルボの眉が好き　緣之介
(軸)不眞少女案外淋しい顏でゐる　晴夫
(同)細き眉不眞少女に思はれる　柳好
(秀)不眞少女二人だましてたびれる　公平
(同)えゝ不眞少女ちすわるマフラ振る　源太

(軸)便箋へ不眞少女の美しい　機見女選

席題〃告示板〃

告示板に女の文字もあてはまる　緩紅
桃割のあとから覗く告示板　六朗
シグナルに人影もなき告示板　緣之介
春麗ら書くとこがない告示板　柳次
はるゝゝと讀まされに來た告示板　源太
告示板片戀らしい字となりぬ　靜太
告知示板も白墨がないのなり　同

相撲吟〃〃　勝句

春の丘戀を語るにひろすぎる　公平
ガタ馬車が通つて行つた春の丘　功
丘を越え姉は都に去つてゆく　靡春
ひとり來た丘にぽかんと晝の月　晴天
丘を吹く風ありピアノ鳴つてゐる　緣之介
春の月ゆるい花緒で丘へ來る　柳次

川柳雜誌社
今治支部

例會

四月十日　貯蓄銀行樓上　曾我部靑明報

兼題「詠　歌」　互選

御詠歌に淋しくなつた旅の雨　一風
佛檀の高さへ詠歌肩が凝り　曉童
御詠歌や春の夕の灯の色や　心府
御詠歌も猫と朧の月あかり　靑明
御詠歌へ線香の煙はすにのび　曉童
御詠歌が榮種畑へ流れてき　靑明
信心でない御詠歌の聲がよし　心府
死んだ子へ詠歌をたのむ夜の長さ　曉童

兼題「繼　母」　曉童選

繼母がにくまれてゐる孝子傳　文庫
町内の噂へ繼母美しい　心府
繼母の涙は嘘としか見えず　靑明
繼母の珠數を持つ手も憎まれる　同
繼母と云ふは煙草ものむ女　心府
(軸)繼母の鼻があんまり美しい　曉童

兼題「陽　炎」　靑明選

陽炎へやつぱり働かねばならず　曉童
陽炎へ上着を持つてくれるなり　同
陽炎の中で日傘は一まわり　一風
陽炎へ叱られて來た目がまぶし　心府
(佳)陽炎の大道に立つインチキ師　曉童
(同)陽炎の石石みんな呼吸をする　心府
(同)陽炎へ杖振つて見る恢復期　文庫
(軸)陽炎へ漁村靜かにねむつてゐ　靑明

席題「銅　像」　互選

銅像の偉業へ櫻咲きほこり　心府
立志傳銅像へ汗拭きにくる　靑明
銅像のわけは知らない仲居なり　曉童
銅像は煙草もほしい顏でゐる　同
雨あられ銅像眼たゝき一つせず　心府
銅像に無禮極まる鳥がゐる　文庫

席題「表　札」　文庫選

表札へ勳八等を書きたがり　曉童
表札はお師匠と云ふ澁さなり　靑明
表札へ躊躇してゐるバスケット　同

表札の跡が殘つた貸家札　心府
表札へマッチを磨つて確かめる　同
(人)押賣は女名前へすつと入り　曉童
(地)表札の銅板朝へ光るなり　宵明
(天)表札を名刺ですます住居　宵明
(軸)表札へ士族の名殘り誇つてゐ　文庫

川柳光耀會 **松代女史歡迎句會**

四月十一日夜　於パンシオン・ホテル

會場を變更して、岩崎柳路、松代夫妻の居間を拜借した。朝から春雨しとゞの夕べとて會する者少く、おちついた句會であつた、お酒がないと人數が少なく淋しい上に名句が吐けぬとあつて、こゝに先例を破る事を默認した。兼題披露の後も熱河の話がはづむ。路郎先生の案内でホテルの中を見學して露臺にのぼる雨は何時の間にかやみ、大大阪の西南部の灯が脚下にうるんでゐた。それより食堂に案内される。ピンク色の壁には「だしぬけに鐘がなるのも旅のこと」の師の額がかけられてあつて、よけいに私共のルームと云ふ氣になつて腰をおちつける。そこへ悟郎氏出席の報がキングより傳はります〳〵佳境に入るところだつたが私は惜しくも席をはづす事にした。

終りに光耀句會を賑はして下さつた柳路夫妻に感謝する次第である。(機見女)

兼題　素　足　路　郎　選

汐干狩素足へ春の陽があたり　房子
美しき素足も春のものとなり　みつる
本堂の廊下素足となる埃　葭乃
片戀へ素足の春のものおもひ　機見女
春泥へいつそ素足になりたがり　同
辻占を賣る娘の足へ親を聞き　松代
新春と別な氣分の素足の妓　同
塗下駄の素足も宵の法善寺　柳路
畫行くと女給素足で飛んで來る　同
(軸)別莊へ戻る素足は蟹を持ち　路郎
(同)胸を病む人の素足の美しき　同

兼題　妥　協　路　郎　選

妥協から亦た銀幕の人となり　房子
妥協して見ても矢つぱり親しめず　松代
味加減見てから仲がなほりかけ　機見女
大阪辯同志妥協をしてるなり　みつる
惡友へ妻は妥協のかげもなし　葭乃
印刷屋半値にまけて刷りかへる　同
調印に妥協の出來た顏が寄り　柳路
妥協出來たらしい應接間の笑　路郎
(軸)妥協せぬ若さが誠を輕くうけ　同
(同)妥協して腰巾着と云はれてゐ　同
(同)妥協して今の月給までになり　同

川柳雜誌社大鐵局支部 **畔柳社臨時句會**

四月十一日　於大鐵局倶樂部

兼題　土　埃　山雨樓　選

土埃浴びた出し雜魚買つてくる　杏林
街路樹の埃落とした春の雨　笙人
幌馬車の埃へ故郷の香を匂ひ　秋生
北濱の景氣土埃が立つて暮れ　ひさし
行樂を二つに割つたバスのごみ　久米雄
土埃まく自動車に妓の笑ひ　天秋
(人)貧競馬土埃のまんさ歸つて來　一峰
(地)土埃春一日をはたらく身　水客
(天)切られたが埃を拂ふロケーション　九天
(軸)土埃牛の眼玉は涙ぐみ　山雨樓

兼題　長　閑　山雨樓　選

長閑さは遍路姿が見へかくれ　一峰
鶯のこゑまでとゞく鉢を置き　久米雄
春の川犬洗ふ人みてゐたり　水客
(人)春の陽がそこまで來て耳掃除　天秋
(地)叱られて出て春の陽に背伸ひす　九天
(天)旅客機の春をさぼる樣に飛び　久米雄

兼題　プラットホーム　山雨樓選

驛賣りの疲れた聲にホーム灯き　天風
プラットへ將軍の髭ちと動き　一峰
父危篤プラットホーム曲つてゐ　同
打水のプラットホーム曲つてゐ　同
(人)プラットのまだぬれてゐ虹が立ち　水客
(地)戀敵同じホームに來合はせる　九天
(天)プラットの遭難場所へ陽がわたり　水客

席題　停　電　一峰選

停電へラッシュアワーの空が晴れ　水客
停電へ煎藥の香流れくる　九天
停電の眞下に祖父の白い髭　天秋
停電へ大きな嘘を考へる　山雨樓
(人)停電へ八燭光を意識する　秀太
(地)物干しへ月を浮かせて電氣消え　久米雄
(天)停電へ娘がまじる賑やかさ　山雨樓

席題　名　人　天風選

値段表名人の作見直され　秋生
米櫃の底名人にあなぐられ　久米雄
名人のそれから先をおしだまり　水客
名人の筆がちびてる年賀狀　久米雄

名人は午後から多忙の袴はき　木履
名人に煙管のヤニがつまつて來　山雨樓
（軸）名人の家ひつそりかんと灯が　天風

席題　世話好き　久米雄選

世話好きと道で出會つた長話　ひさし
世話好きは女房に少しうらまれる　山雨樓
世話好きな辯で四十をひとりで居　水客
世話好きな女は家に落ちつかず　天風
（人）世話好きな男提灯かりて去え　水客
（地）世話好きのたもと寫眞を入れて　山雨樓
（天）世話好きの聲がかれてる祭の夜　九天
（軸）世話好きは泣く子に呉れ錢が要り　久米雄

席題　肩を組む　秀太・ひさし共選

義理すてゝ宵の鋪道に肩を組み　久米雄
嫁く話花の名所へ肩を組み　九天
上陸の朝のしぶきへ肩を組み　水客
肩を組む二人ぢたりと草に寢る　山雨樓
（佳）肩組んで女工しんみり國の　九天
（同）肩を組む校歌へ女給遠ざかり　秋生
（同）肩組めば互ひに溫い春の宵　天秋
（軸）肩組んだ瞳汚れたユニホーム　秀太
（同）性格と趣味のリズムで肩を組み　ひさし

席題　汽笛　披講互選

送られる女へ汽笛きつう鳴り　久米雄
炭燒きに遠い汽笛の親しまれ　九天
賣られる娘汽笛へジツトうなだれる　木履
入船の汽笛が霧にのつてくる　水客
遲參して我社の汽笛高くきゝ　九天
故郷を出る汽笛は故郷の山を越え　久米雄

畔柳社一葉集　山雨樓選

陽炎の中で二八の戀おもふ　天八
猫の耳動いたゞけの春の夜　一峰
寫眞班訓辭と云ふによじ登り　水客
皆あてがある足並の交叉點　久米雄

畔柳塔　意地悪　山雨樓選

意地悪を級長輕くさばくなり　水客
意地悪い女將の顎の黑い痣　一峰
意地悪へ猿はお尻を見せただけ　天八
意地悪のそれから先は云わぬなり　秀太
事もあらうに姑の飯に石　某人
（人）意地悪がまとまる話枉げにくる　木履
（地）意地悪の銀のきせるが凹んでゐ　某人
（天）意地悪のまんま淋しい盞の灯　天八

觀月、卜居、對吟（大阪）

四月十二日　淀川畔ニテ　川村觀月報

題　霧

霧ふかく簑着る母と種まきぬ　卜居
朝霧のなかの女工の足並よ　觀月
警笛とヘツトライトへ霧ふかし　同

川柳雜誌社
川柳行人會

京都夜櫻吟行（大阪）

四月十四日夜　平井與三郎報

席題　夕櫻　鐘

京の町追はれるやうに鐘をきゝ　節子
圍體がもめあつてゐる夕ざくら　同
出養生ある日の鐘が強うなり　史呂
夕櫻定期船から綺麗なり　同
夕櫻子供に先を急かされる　同
京の鐘幹事解散せまられる　與三郎
東山闇にとけゆく鐘が鳴り　同
夕櫻背なに重たい子がねむり　同
篝火へたきゞなくばる夕ざくら　同
夕櫻見上げて歸る小商人　同

川柳雜誌社
竹原支部

觀櫻句會（廣島）

四月十四日　於眞改庭園　承春報

正午頃より雨となる、滿開への雨も又格別の情緒集ふ者八名　兼題披稿後春雨に香る花をめで盛大に歡を盡す。

兼題　踊　蛙庵選

踊り方教へてくれる手の白さ　芳泉
踊る氣になつて盃ぐつと干し　承春
踊る氣になつてしま花の下　春帆
（秀）ダンサーの疲れへ目立つ紅ゞ唇　芳泉
（同）重役が去つて踊つたなと思ひ　春帆
（人）傀儡となつて踊つたなと思ひ　同
（同）踊の輪師匠の指のゝびること　曉童
（地）心かから踊れゝ彼に金があり　彌生
（天）子の踊るそのあでやかに母は泣き　香山

兼題　霞　承春選

春霞俺の心がわかるかい　彌生
霞から白帆だん〳〵白くなり　曉童

滿洲國皇帝歡迎

皇禮砲霞める空の日滿旗　蛙庵
（佳）春霞白帆動くでもなく動き　春帆
（同）爆音が霞の中を遠ざかり　芳泉
（人）變迭もなくわしが國さの春霞　蛙庵
（地）郷愁を窓からさそう春霞　春帆
（天）夕霞燈臺の灯の靜かなる　芳泉
（軸）見下せば僕等の村も霞んだ居　承春

兼題　罰　春帆選

冷汗がポタリ過料へ捺す母印　蛙庵

自から罰する事のむづかしき　呂烈
いさぎよく悪のむくいへ目をつぶり　芳泉
(佳)賞罰を明かにして恐れられ　彌生
(人)私生子の指弾へ前科悔いられる　蛙庵
(地)罰といふ様上座からもらひ　瞳童
(天)裏切りへリンチの陰がつきまとふ　芳泉
(軸)罰されし記憶も老いた師と会ひ　春帆

席席　笑ひ　(一同出題者選)　春帆選

何事も笑つてまざらす腹が出来　彌生
(佳)おかしさがあまつて嬢泣き笑ひ　承春
(軸)笑つて頬が淋しくゆがんでた　春帆

席題　梅　香

梅の香のまどろむに似て去り難く　呂烈
異端者のそしりを梅の香にひたり　蛙庵
老梅の朽なん花の痛々し　芳泉
(佳)憂鬱は梅の青さへ五月雨ふる　承春
(軸)生梅を欲しがる妻は又みもち　香山

席題　下　駄　承　春選

俺の個性を下駄知つてる　春帆
(秀)なれそめのもとは雪駄の花緒から　香山
(人)問の個性に下駄のゆがみ様　承春
(天)憤懣のやりば下駄のほ音にも　承春

席題　拳　蛙　庵選

秋田拳、表情の方面白し　承春
合拳が續いてすこし媚びてみせ　呂烈
相拳のもつれが解けて呑み直し　香山
(佳)拳一ツ知らずに老けた淋しさ　彌生
(同)拳くる〳〵威嚇者としての示威　蛙庵

席題　烟　冷　彌生選

烟冷は勿體ないとも尚も呑み　香山
烟冷の様な男だなと言われ　春帆
烟冷をあふつてもみる不眠症　呂烈
(秀)やつと今誤解がとけた烟が冷め　芳泉
(軸)さいそくへ烟冷さめて御返盃　彌生

席題　さ　止　メ　芳泉選

呑みすぎて吐いて見たが痛いのさ　香山
ごうせ別れたあげくの棄鉢さ　春帆
面白さ、やつぱり酒の有難さ　芳泉
(軸)付馬を妻に見られたバツ悪さ　同

席題　感傷過多　呂烈選

感傷の手招く様に三原山　蛙庵
ミシン針感傷過多いらだゝせ　承春
(佳)青春の泣きたい夜が續くなり　芳泉
おい春帆よ春だぜ
(軸)妙なこと感傷過多で肥つゐ　呂烈

つどひ

第廿五回　姫田夕鐘報

「里」

持つて来たほど持つて行く里帰り　水車
里を出ても一度紅をしめ直す　同
桑畑桑畑横切つて妻の里　夕鐘
故郷の父は麥から顔を出し　同
里育ち肉感的な腰の線　同

緑雨居偶會

四月十五日夜　橋本美奈子報

「旅」　五　選

空の旅本家に一寸叱られる　與三郎
年寄りの旅だち暦繰つてゐる　史呂
行先きはうれし子の足親の足　鮎美
君がおらぬ淋しさよ旅の宿　緑雨
かなしくもあまりに長い姉の旅　美奈子

「足」　互　選

波がしら素足冷たい汐干狩　史呂
巻煙草喫ふに女に足を組み　與三郎
足踏みにいたづらをする男の子　緑雨
足なみがきれいに揃ふ上級生　美奈子

雑誌社　川柳　伯耆句會（鳥取）

四月拾六日　於伯耆手間大安寺　三鴨　美笑報

伯耆川柳同人として懸命に作句に希望を持つて居た若き福間希照を櫻の春永遠に此の句會から送りて追善句會を開き悲しい一夜をおくつた。

兼題　花　曇　美笑選

(五)花曇一聯隊が丘の上　起人
(同)菩提寺のかすかに見える花曇り　仰天
(同)花曇街の夜の灯もうす明し　小判
(同)花曇一家揃ふた散歩なり　起人
(同)花曇りする頃娘紅をつけ　秀峰
(軸)巡禮のごこまで續く花曇り　美笑

兼題　ステツキ　美笑選

(佳)ステツキの二本混つた散歩なり　起人
(同)ステツキを妻に持したて子誕　仰天
(人)ステツキで合圖を知つた不良團　笑月
(地)上役に出合はステツキ邪魔となり　秀峰
(天)云ひ切れぬ話にステツキ草を打ち　小判

兼題　旅　美笑選

希照氏を偲ぶて

旅立つた同人寫眞見る涙だ　柳里
隣室の話氣になる旅の宿　秀峰

伯耆川柳會同人福間希照追善句會

（前列右より）小判、蹴鞠、美笑、柳里、一柳
（後　列）笑月、超人、仰天、秀峰の諸氏

希照氏を追悼して

黄泉の旅に青春の淋しかり　仰天
旅の宿欠伸の續く一人風呂　同
放涙の旅もやつぱり春にあい　起人

席題　足音　互選

足音へ夜るの靜けさ犬がせぎ　柳里
足音へれづみ行塲をわすれたり　笑月
足音を知つて巡禮少し待ち　千代童
足音へそれから話し切れてゆき　同
足音にはじかれた樣に女わ出　小判
半鐘の亂打へ足音荒くなり　同
しなやかな足音に向く皆の顏　秀峰

席題　道伴れ　互選

一日の道伴れだけが緣でした　起人
道伴れの立小便を待たされる　秀峰
道伴れは其處らあたりで聞き言ひ　美笑

川柳雜誌社　**梅田句會**（大阪）

四月十八日　於ひかり莊鮎美居

題　雜　詠　方　眠　選

豐彦をはつきり知る日夜がしらみ　夕鐘
（佳）夕闇へ口笛をふく二階借り　觀月
（同）いけるくち君もいけるかうれしい　靜波
（同）足まげて寢ればたのしい夢なる　遊歩
（同）醉ふた眼のおんなぢ顏にへてくる　鮎美

題　櫻さく窓　靜　波選

櫻さく窓に詩人の顏髮ほそし　鮎美
（佳）庵の窓しだれ櫻が今さかり　方眠
（同）櫻さく窓の陽射しの吸取紙　觀月
（同）メロデーの櫻さく窓青みゆく　ト居
（同）獨唱の窓へ櫻がちつてくる　鮎美
（同）さんざめき櫻の窓はあけはなし　夕鐘
（軸）櫻さく窓へ憂鬱凭れかけ　靜波

題　男　遊歩選

煙突へあがる男になつたろか　觀月
男一匹この荒涙を乘りきらん　靜波
毒藥と男の生命妓のいのち　鮎美
（佳）しみたれの男にされた春の宵　夕鐘
（同）義理たてゝ男の端に座らされ　ト居
（人）嵐々男になつて戻るなり　鮎美
（地）震動へ男は電球視つめたり　觀月
（天）泣きながら男の羽織たゝんでる　鮎美
（軸）暗がりの男はさきに歩くなり　遊歩

題　連想戯作

新婚の歸る時間をいふて出る　遊歩
いふて出るきまりのわるい切れ話　方眠
切れ話こゝろの闇がつゞくなり　鮎美
つゞくなり畫の濱邊の松並木　靜波
松並木ぬけると叫びながらゆく　觀月

題　女兒安產　觀　月選

女の子主人はすこし不平なり　方眠
（人）安產を靴ぬぐとこへ知らさる　遊歩
（地）女の子それでも自慢の里の母　方眠
（天）安產へきつちりあてた女の子　靜波
（軸）初產は女がいゝと言ふてくれ　觀月

カラス吟社句會（出雲田儀）

四月廿三日　於倶樂部　章泉報

兼題「春雨」「幸福」「恥」

脂粉の香そのまゝ春の雨となり　美章
默々と降る春雨を男女で見　章泉
春雨の靜けさへ獨酌の淋しさよ　蝶次郎
生甲斐の幸福であつた事を知り　同

幸福の絶頂にあり初入選　迷天
二人の散歩幸福そうに空は晴れ　苦笑人
慈善鍋入れて幸福な顔で行き　章泉
空想のそれからそれが幸福だ　同
恥なぞゝ云つて居られぬ生活さ　美稻
我が恥と知りつゝ言つてる酒の酔　天花
恥かしさ母遠慮なく叱り　蝶次郎

席題「帽子」「原」「日曜日」

冷酒一パイ帽子のまゝの味　章泉
辨當を開く野原に陽は麗らゝ　美稻
廣い原雲雀一羽落ちて行き　星辰
滿蒙の曠野に非常時流れてる　市丸
陽炎の原にのどかな牛の聲　美稻
洗髪女工寄宿の日曜日　若人
葉櫻の陰に戀あり日曜日　美稻
くつろいであくびの出る日曜　星辰
日曜を留守居にされて日當ぼこ　美稻

川柳雜誌社
御池橋支部　**卯月句會**
四月廿六日夜　於日本樂器會社

西いわを報

席題「競賣」　互選

競賣をすまし父また酒をのみ　星光
競賣へふつとつけた値できまり　一羊
競賣へ大きな男禿があり　青兒
競賣が續き空しき藏屋敷　夢裡
競賣をすまして皈る寢臺車　いわを

席題「先輩」　梅子選

先輩の話も聞けよと寄つてくる　晤栽
先輩のセルの袴を借りて行き　かほる
先輩は子供の無いを寂しがり　いわを
先輩に未だ懷しい癖があり　青兒
新入へ受付先輩らしく居る　夢裡
(軸)先輩といふ仲裁にまけてやり　夢裡

席題「金庫」　選

金庫背に控へて勤續三十年　一羊
信用へ金庫の角がはげて行き　かほる
計算が合はぬ金庫の日附印　いわを
勘當に癒な金庫の合數字　梅子
金庫から出る紙屑は利がかさみ　梅子
金條が金庫の前でよく光り　青兒

席題「入學」　かほる選

どの子もどの子も可愛い入學日　星光
入學に父親もついてくる品子
入學の嬉しいランドセルが鳴り　青兒
入學の子はカタログを嬉しがり　法林
入學に先づ先生の名を覺え　いわを
子は母を母は子を呼ぶ入學日　夢裡

兼題「テープ」　かほる選

感激もなくてテープの端を持ち　いわを
愛情をテープに託し送る娘　法林
見送る眼テープの雨のかげに立ち　梅子
最う逢へぬテープがわけもなく切れ　青兒
縱横のテープへ名殘りつきぬなり　夢裡
出帆へ間に合ひテープ堅く持ち　同
(軸)好い姿テープは長く續くなり　同

川柳雜誌社
籔川支部　**大地吟社例會**(出雲)
五月一日夜　於綠之助居

兼題　財布　綠之助選

生活の侮蔑へ財布投げ出され　凡愚
財布二度あけて見るもの妻なれば　木棄子
空財布そこらに置いてれむつてる　美稻
酔ひどれの財布の仕末だけが出來　田鶴緒
財布の底をはたいてまけさせる　華村
(人)この通り財布を出して涙ぐむ　大朗
地)空財布理性はるかになしりくる　木棄子
(天)病む妻の財布の紐の赤いこと　華村

同　豫定　選

間諜の腦裡に深き豫定表　綠之助
二次會の豫定が違ふにぎやかさ　同
(人)豫定通りして戀は淋しい　章泉
(地)明日の豫定へじつと胸を組み　凡愚
(天)ピクニックの豫定の歩足に春うらら　太朗

席題　嫉ひ　田鶴緒選

死ぬるまで繼母を嫉つた魂よ　木棄子
嫉はれて歸る裏町に霧流る　朴泉
私が私を嫉つて夕の細道　好郎
嫉はれて女給はレコードの針を替へ　木棄子
今日も來て妾の猫を嫉ふなり　綠之助
嫉ひとも言へず恩師へうつむいて　同

同　工事　凡愚選

工事場の隅で芽ばえた戀でした　華村
工事場へ今日も來てゐる村の子等　朴泉
千圓に足らぬ工事を呑んでゐる　綠之助
工事場へ粋な女が來る日なり　同
(人)バラックで復興工事の握り飯　好郎
(地)よいとまけ夫は土を運んで居　綠之助
(天)儲からぬ工事三角な月が出た　同

同　犬　木棄子選

庶先の小犬の夢は何んだろか　朴泉
癒へし夜の窓犬の遠吼え　健芳
悲境の主へドラマチックな犬が來る　綠之助

もの思ひ默つて犬に膝を貸し　華村
同　近　朴泉選
近々と迫る男に氣が尖る　華村
近い爲破談となつた戀雷門　田鶴緒
(秀)近視眼それだけの就職難　緑之助
(同)逢其處の女へ弱氣な戀をして
英田村
青年合同**文藝大會川柳の部**(石川)
(時)十五日　(場所)能瀬教場圖書室
五月三日　前田義風子再記投報
兼題　辻　占　義風子選
(佳)辻占はいたゞいてからひらくなり　北川
(同)辻占を取卷いてゐる皆の目　寺西
(同)辻占の聲きいてゐる寢正月　池田
(同)辻占はいゝのを當てた聲をあげ　中川
(人)辻占は嘘と思へぬ程あたり　北川
(地)又始まつた辻占が座を沸かし　寺西
(天)辻占へ明日への期待淡くかけ　池田
席題　日　記　義風子選
正月はこれから日記つける氣の　北川
人樣にみせれぬ日記帳となり　寺西
下積の日記へ今年の主義が燃え　木本
面影を別なる意味でとゞめあき　中川
血涙の半世がまざと日記帳　木本

山本葉光居枕頭吟

五月四日　散　髮　秀山報
理髮師の思索に餘るうすい髮　豆秋
パリカンが椽に出て居る日曜日　葉光
小庫の日向の椽で散髮し　同
散髮屋客の話も受け賣りし　秀山
顏剃りに來た妓に床屋暇が要り　同
○
虎刈りにされた日もあり長病ひ　葉光
理髮師は一服吸つて次を呼び　秀山
剃刀を上げてくさめの濟むを待ち　同
散髮屋待たされるのを惜しむ春　同
散髮屋王手飛車が氣にかゝり　豆秋
下剃りはこれが蝶六とは知らず　同

本社同人會

五月七日　於本社事務所　增位汀柳報
兼題　光　路郎選
錢あまり光つて心落着かず　某人
人絹のにぶい光りを派手に着る　秀山
ハンドルの光る間は雨もよけ　艸樂
女しばしダイヤの光りへあきれた　與三郎
よき母の光るものから遠ざかり　同
寂光の心もとなく生きんとす　夕鐘
成上り光の部屋で泳ぎゐる　同
あの光この光ネオンに吸ひ込まれ　夢裡
嬉戯へ百燭光の灯がまぶし　同
御光の洽く盟邦悉がなし　同
(人)百圓の光に若い妓が落る　艸樂
(地)光るものゆ齒だけなる身のあは　汀柳
(天)七光り五十を越えてまだ言はれ　史風

光耀句會**さつき例會**

五月十八日　於キンゲ喫茶室　機見女報
兼題　メニュー　葭乃選
メニュー見て母も同じ鮮を取り　美津女
あなたかせでメニュー目もふれず　機見女
母性愛メニューをじつと見つめた　公子
待合す時間メニューを持てあそび　節子
むつかしい名前でメニュー親しめず　同
醉ふた眼のメニューへ夜の蠅がくる　鮎美
キャバレーのメニューに時價が多すぎ　同
(軸)その中の二三は出來ぬメニューで　葭乃
みつ豆を云ふメニューを奪ひ合ひ　同
ふところのさびしさメニューに念が入り　同
ロンスプンのすくがらも見るメニュー！　同
二人並んでメニューにひまのかゝる　同
兼題　紅　茶　葭乃選
紅茶器へ彼女の好み表はれて　美津女
さゝげもつ紅茶の色に出でし宵　機見女
アドバルーン紅茶がほしゝビルの窓　同
女の友情紅茶はあつし　鮎美
珍客へ紅茶がゆれるばかりなり　同
青春の胸のあたりへ紅茶のみ　公子
久し振り紅茶の匂ひからわらい　同
一杯の紅茶に話すこと多し　節子
ベランダの紅茶に青させまるなり　同
麗人のパフはやすずコールティー　同
(軸)シルバースプン紅茶の色を掬上ひ　葭乃

編輯の窓

汀柳

▲本號は路郎主幹初め編輯局大童となり兎も角遲刊挽回に努めた、それでも豫定よりは多少遲れたが次號よりは前月末に届く樣、内容刷新と共に完璧を期してゐる。

▲路郎主幹の「書齋にて」は川柳家が大いに考究すべき好文字である。松山の大樓氏は久濶に山雨樓氏は公務多端の中に寄稿本號を賑はれた。

▲川柳二十日會記事は皆が餘り愉快になりすぎて怠けた型となつてゐたが、本月は機見女、艸樂さんの手により復活されたのは嬉しい。

▲名編輯長山雨樓氏送別句會の後、本社事務所階下ホールで小宴を催し、同氏の榮轉を祝する盃は擧げられた。列席者は路郎師、綠雨、九天、青兒、夢裡、いわを、八步、史風、豆秋、夕鐘、素月、悟郎、久郎、角嵐、世間音、ひろし、亂耽、正光、東魚、溪花坊、美奈子、禿山、與三郎、鶴峯、史呂、墨洲、艸樂、翠夢、汀柳の三十名であつた。

▲劍花坊句碑建設基金として左記の方々より献金された、六月十日に柳樽寺川柳會に送金の豫定です、それ迄に本社事務所へ委託される樣願ひます。(一日五十錢)

(五日)路郎、(二日 山雨樓、亂耽、汀柳、(一日)艸樂、禿山、翠夢、夢裡、青兒、いわを、八步、世間音、素月、夕鐘、與三郎、悟郎、久郎。

▲本社句會の兼題天位賞として路郎カップを授與する事となつた、これは劃期的な企てとして川柳界にセンセーションを換起すること、思ふ。六月句會より毎月路郎盃を贈られる事となるので、奮つて句會に出席されるやうお奬めする。

▼本社同人の木曜會は前號に發表した通り毎週木曜日の夜、本社事務所で催してゐる、路郎主幹も必ず出社される事となつてゐるので、木曜の夜は忘れずに來社されたい。

▲本號の編輯には與三郎君、機見女さんを煩した。

大峯登山吟行

七月二十一日出發(洞川一泊)

同　二十二日歸阪

會費　金五圓五十錢

主催　大阪　探勝　吳久樂會

後援　川柳雜誌社行人會

(申込は大阪市西成區鶴見橋通五ノ四　青木史呂宛)

日本名所名特川柳

投句募集

東京の卷

(五)「吉原」　三句　〆切六月五日

(六)「日本橋」　三句　〆切七月五日

選者　前田雀郎氏

宛先　本社事務所

用紙　ハガキに限る

本社

同人會

日時　六月四日(火)午後六時

場所　本社事務所

兼題　「昼襦袢」三句路郎選

會費20SEN

川柳雑誌案内

六號活字十四字詰三行金五十錢、一行開すこと（但し節金十錢、切手代用可）、句會案内、柳業廣告、その他

並製 **合本特賣**

「川柳雑誌」の合本第二卷より十卷まで

各壹卷 **金壹圓五十錢**

大阪市内送料壹冊六錢
市外送料壹冊廿四錢

大阪市天王寺區上汐町二丁目五二
川柳雑誌社

懸賞川柳募集

題「夏」 六月十日締切 路郎選

その他雑吟を募る

▼用紙 官製ハガキ（化粧柳壇と明記の事）

▼賞品 秀逸數句薄謝を呈す

▼投吟所 大阪市玉出本通三の三六 麻生路郎氏宛

化粧新聞社

川柳きやり

菊判毎號七十數頁

毎月一日發行一部廿五錢

東京豐島區高田本町二の一
四六八 川柳きやり吟社
（取次所）川柳雑誌社事務所

紀南柳壇

選者 麻生路郎氏

海岸 五句

〆切 六月二十日

大阪市西成區玉出本通三ノ三六
麻生路郎氏宛

朝報柳壇

選者 増位汀柳

題「信心」〆切六月十五日
題「自慢」〆切六月三十日

雑吟は〆切なし、用紙ハガキ

大阪市西區四ッ橋南
大阪朝報社 増位汀柳宛

毎日必ず川柳の記事が出てゐる大阪朝報をお讀み下さい。

（一ケ月五十錢、郵税共六十五錢）

川柳雑誌 投句用箋

本社制規の投句用箋を左の通りでお頒ち致します、投句にはなるべく此用箋を御使用下さい。

五十枚綴 一冊 金拾貳錢（送料共）

▲御申込は本社事務所へ（切手代用も可）

本社六月句會

一、會場 川柳雑誌社會館（階下ホール）

上本町四丁目バス停ノ所西へ約半丁始めの四つ辻を南に折れると左に見える洋館

一、日時 六月十日（月曜）午後六時半

一、兼題 「祈り」三句 路郎選

一、講演 「實觀と空想」 麻生路郎

◎出席者全部に本社川柳マッチ（森東魚氏執筆）を呈上

◎路郎盃 兼題天位賞として路郎盃を授與

會費 30SEN

主催 川柳雑誌社

（幹事）綠雨、與三郎、史呂、友帆、みつる、いわを、（句會係）禿山

光耀句會 六月例會

場所 キング喫茶室 南海線玉出驛下車本通十五間道路北ノ辻西入

日時 六月二十日（木曜日）午後六時半

兼題 「鐘」「單衣」 各題十句以内

會費 參拾錢

木曜會及び二十日會と重なりますが、これも又趣が變つて面白いと思ひます。木曜會へ寄つて、それから二十日會及び光耀會の會場、キングへいらつして下されば、どの會へも一度に出席出來て御便利かと思ひます。御遠方の方は兼題の投句を御記憶下さいませ。

主催 川柳光耀會

幹事 竹内機見女

川柳雜誌社關係の人々（順はろいし）

賛助員

池澤樂居　末弘嚴太郎
長谷川一徹　伊藤彦造
大道弘雄　鳥山一步
岡本一平　大島濤明
片岡直方　大谷五花村
笠原路生　大西長三郎

同

田中辰二　岩崎柳路
嘉納純　岡田三面子
長崎柳秀　川上三太郎
長岡牛太郎　川村花菱
長野晴濱　米村あん馬
國枝史郎　田村孝之介
藤村作　谷脇素文
藤本卯之助　窪田銀波樓
顆原退藏　安川久流美
淺田　赤井清司　前田雀郎
前田五健

食滿南北　柴谷宰二郎
篠原春雨　藤里好古
姪子省二　森人
小林不滿人　東魚
石曾根民郎　市場沒食子
原史風　長谷川三汀
西村山月　西村明珠
大鶴喜由　大四八步
阿形一杉　江戸みつる
後藤青兒　近藤勇
朝田新水　福田鶴峰
日野華水　東谷閑路
姫田夕鐘　平井與三郎

編輯局（同人）

橋本綠雨　西田艸樂
山本雨迷　廣田六浦
増位汀柳　福田山雨樓
麻生葭乃　住田亂耿

吉田水車　喜多春秋
宮岡白峰　高橋かほる
立井登美坊　三輪夏曉
中西おさむ　水谷鮎美
中澤濁水　芝四葉
清水友帆　阿部閑生
村松夢裡　平井蒼太
熊谷紅　平井春光
松下小柳子　平井與三郎

同人主幹

北山悟郎　生田翠夢
麻生路郎

道頓堀支部（大阪市）幹事庄万よし
九三會支部（大阪市）幹事北山悟郎
神戸支部（神戸市）幹事首藤竹楓
國館支部（國館市）幹事亀井晟修
高知支部（高知市）幹事國澤春水
梅田支部（大阪市）幹事水谷鮎美
螢ヶ池支部（大阪府）幹事福田浮鬼
田邊支部（和歌山）幹事辻左馬
籔川支部（島根縣）幹事尼絲之助
京都支部（京都市）幹事平岩司郎
鳥取支部（鳥取市）幹事中島鐵州
堺支部（堺市）幹事八木美夜路

松山支部（松山市）幹事石丸晴朗
御旅支部（大阪市）幹事生田翠夢
天王寺支部（大阪市）幹事須崎豆秋
鶴町支部（大阪市）幹事宮岡白峯
御池橋支部（大阪市）幹事西いわを
松江支部（松江市）幹事岡崎祥月
塗青支部（大阪市）幹事熊谷紅
大鐵局支部（大阪市）幹事植山九天
西條支部（愛媛縣）幹事荒井英賀夫
光繿會（大阪市）幹事竹内機見女
住吉支部（大阪市）幹事奥野禿山

今里支部（大阪市）幹事吉田水車
玉造支部（大阪市）幹事清水友帆
今治支部（今治）幹事曾我部宵明
光笑會（大阪市）幹事永田里十九
新居濱支部（愛媛）幹事越智虹子
伯耆支部（鳥取）幹事三鴨美笑
竹原支部（廣島）幹事町田承春
川第二支部（島根縣）幹事加藤健力
行人會（大阪市）幹事平井春光

投稿規定

▼投句は總て葉書又は同型の厚紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。

▼「近作柳樽」は全作家の雜吟を募る

▼「川柳塔」への投句は同人に限る。

▼各地會報は半紙判原稿紙に清記の事

▼文章は二十字詰原稿紙使用の事。

▼書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」と封筒に朱記の事

▼締切は嚴守されたし。

▼投稿其他につき御問合はすべて返信料封入の事。

募集

第十二卷第八號課題

六月五日締切

（各題十句以內）

▼アパート　住田亂耽選

▼島　中島鐵洲選

第十二卷第九號課題

七月五日締切

（各題十句以內）

▼月　吉田水車選

▼時計　西村明珠選

毎號募集

▼近作柳樽（雜吟十句）　麻生路郎選

▼各地柳壇（會報）

▼文章（評論研究感想吟行漫文）

社告

社務一切は事務所宛

定價

一部　金參拾錢

半箇年前金（特輯號共）壹圓八拾錢

壹箇年前金（特輯號共）參圓六拾錢

▼御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を差立てますが御不在中にでも頂ける樣に願ひます、但集金郵便（一年分）には定價の外に手數料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりと御指示願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひま・▼川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

昭和十年五月廿五日印刷
昭和十年六月一日發行
第十二卷第六號
（毎月一回一日發行）
大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地
編輯兼發行印刷人　麻生幸一郎
大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地
發行所　川柳雜誌社
電話天下茶屋二五七九番
大阪市天王寺區上汐町一丁目五一番地
事務所　川柳雜誌社
電話南六四四番
振替大阪七五〇五〇番

禁無斷轉載

廣告料

本誌への廣告に就いては事務所へ直接御一報下さいますれば御相談に應じます。

賣捌書店

（大阪）大寶堂二盛社書店—明文堂其他市內各書店—（東京）東京堂厳松堂吉岡書店玉森堂紀伊國屋三味堂（神戸）米田、寶文館（國館）石塚（京都）三宅（名古屋）靜觀堂

新刊

川柳史講話

法學博士 三面子 岡田朝太郎先生序・海野夢一佛氏新著

四六版總特上布裝
極堅牢上製本
口繪寫眞凸版圖
函入四百十餘頁
定價金二圓二十錢
送料金十六錢

江戸時代文學並に國文學詩歌川柳を研究する人々へ

初めて出版されたる川柳史の第一書！

今日まで全世界に行はれて來た詩型中最も短い型態を整へ、日本獨特の修辭と表現とを以つて、自由な內容を縱橫無盡に表現してゐるものは川柳である。川柳こそは世上の平凡事を、巧に拉し來つて冷徹なる批評眼に寫して卽詠し、其處には何等の作爲もなく只眞實あるのみであるが、その卓越せる觀察眼を通じて第三者の眼前に展開せられる時是を觀る者は常に身邊に見聞せる事實の剔抉であるだけに、却つて呆然たる態で川柳の句を奇拔なりといふも、奇拔、奇警といふのは、實は川柳の句の變態的に發展したる、狂句の上に與ふべき言葉であつた。然らば何故に「川柳」と「狂句」とが混同せられたか、それには理由がなければならない。その理由こそは川柳史を繙きて初め理解さるるのである。

斯くの如き川柳を語り、川柳の歷史を語る著者は、夙に江戸文化の研究に志し江戸時代より今日に至る東京を語れる「東京巷談」の筆者として名あり。又川柳に志してより約三十年、或は川柳きやり吟社の主腦部とし、或は日刊新聞雜誌の川柳欄選者として知られ、先著「はしからはしへ」の如きは、江戸文化の研究と川柳の造詣の深きを語るものであり、又、先年は文部大臣の推薦により、藤村作博士、山崎麓學士、岡田朝太郎博士等と共に稀覯本「誹風柳多留」壹百六十七卷を完成せる等、川柳界稀に觀る篤學の人であり且つ初めて公刊せらるゝ本書「川柳史」の著者としての當代第一人者である事を、岡田博士等の等しく絕讃せらるゝ所である。

＝苟も文學を解し詩歌川柳を口にする諸彥の絕對的好座右書＝

發行所 東京市小石川區江戸川町八十番地 振替口座東京四〇二七九番 交蘭社 電話三五一一 小石川番

清酒

白鶴禮讃

白鶴の瓶たまることたまること
白鶴へみんな揃ふたいゝ話
いゝ酒と言へば白鶴持つてくる
白鶴を一本つけてからの事
百事意の如く白鶴呑んでゐる
當選に白鶴樽のままで來る
貧乏の中に白鶴だけの味

攝津灘 嘉納合名會社釀

大正十三年三月三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
川柳雜誌（第一三七號）
定價金三拾錢 送料壹錢

ルービの等れわ
ユニオン製特

全市場におくる
躍進ユニオンの特製！
さすが
本場を誇る
獨逸ビールを
遙かに 凌ぐ この爽快味
これぞ！ 日本の新ビール

新發賣

宮内省御用達
大日本麥酒株式會社 元造醸ルービ・ロポツサ・スピエ・ヒサア